

# 桜井市纏向遺跡辻地区土坑 10 出土筒状繊維製品の再検討

## —近江・稲部遺跡の集落出土武具との比較研究—

森岡 秀人<sup>i)</sup>・戸塚 洋輔<sup>ii)</sup>・東村 純子<sup>iii)</sup>

**要旨** 纏向遺跡で昭和 46 年 (1971) に出土し、「筒形編物」、あるいは「筒形織物」として写真が報告された「筒状繊維製品」について、マイクロスコープによる観察、実測図の作成を行い、資料紹介を試みた。また、筒状繊維製品の出土状況、共伴土器を再検討し、実測図未作成の共伴土器の実測図を作成し、時期の検討を行った。筒状繊維製品の型式学的検討、筒状繊維製品と稲部遺跡出土鞆との比較検討から、筒状繊維製品は、庄内式期末頃 (3 世紀第 2 四半期末) に位置し、細糸を用いた綾織りによって綾杉文様の織組織が作り出された鞆であると判明した。さらに、布留式前半 (3 世紀第 4 四半期) の古墳副葬鞆との比較検討により、纏向遺跡例は、稲部遺跡例と並ぶ列島最古段階の鞆であり、鼓山タイプの古相資料と位置付けられ、古墳時代前期の鞆の系譜の端緒となる可能性が考えられた。纏向遺跡例は、集落遺跡の祭祀土坑とみられる遺構から出土した点も重要であり、列島の鞆の系譜に関わる問題だけでなく、古墳出現期の纏向遺跡の集落像を考える上でも今後欠かせない資料になると考えられる。弥生時代において絹織物の繊維製品は現在のところ皆無であり、今回、素材と新たな器物としての鞆が前期古墳の副葬武具として確立をみて、有力首長の威儀を示す道具立てに加わったプロセスの一端が明証できた歴史的意義は大きい。3 世紀中頃より少し前の時期において、対外関係を東アジア史の中で考えると、年代の上では倭国の発展過程で耳目を集める景初 3 年 (239) より始まる卑弥呼の対魏外交が契機となって下賜品や答礼の品々が招来されており、相互の技術交流や工人の動きを通じた日本列島の紡織技術の発展や養蚕の動向が検証の射程に入る。こうした問いにも応答するさらなる検討と分析の課題を提示した。

**キーワード** 纏向遺跡、稲部遺跡、筒状繊維製品、最古の鞆、古墳出現期

## I. はじめに

### (1) 本稿の目的

今から 50 年以上前になる昭和 46 年 (1971) ~昭和 50 年 (1975) にかけて、辻地区と東田地区を対象とした纏向遺跡の初期の発掘調査が行われた。この調査では、辻地区の土坑から 1 点の筒状を呈する繊維製品が出土し、「筒形編物」、あるいは「筒形織物」として出土時の写真と一部の共伴土器が発掘調査報告書『纏向』において報告されていた (石野・関川 1976) が、これまでほとんど注目されることはなかった。しかし、令和 5 年 (2023) 6 月 1 日、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館において、森岡、戸塚、東村が古墳時代初頭の鞆や繊維製品の調査研究を目的にこの繊維製品を調査したところ、古墳時代初頭の繊維製品の研究に留まらず、纏向遺跡や関連する遺跡の議論にも及ぶ資料であると考えられた。

そこで、本稿では、桜井市纏向遺跡辻地区土坑 10 で出土したこの繊維製品を「筒状繊維製品」として実測図と観察所見を提示し<sup>1)</sup>、共伴土器とあわせて再検討するとともに、帰属する年代の考察、型式学的検討、織物組

織の観察と分析を通じてその評価を試みたい。また、滋賀県彦根市の稲部遺跡出土鞆等の古墳時代初頭の繊維製品、前期古墳に副葬された鞆と比較することで、共伴土器の検討をふまえた纏向遺跡出土筒状繊維製品の占める歴史的な位置、古墳出現期社会の動向や様態について考えてみたい。筒状繊維製品は現在、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館が所蔵し、一部を除く土坑 10 出土土器は桜井市教育委員会が所蔵しており、令和 6 年 (2024) 8 月 26 日、桜井市立埋蔵文化財センターにて土器の調査を行った。

### (2) 問題の所在

纏向遺跡出土筒状繊維製品の再検討にあたっては、同時代の比較資料として、古墳時代初頭の鞆として評価され、列島における最古段階の資料として注目される稲部遺跡 19 次調査 (2019 年) で出土した带状漆塗繊維製品 (植田ほか 2021、戸塚 2022、戸塚ほか 2021・2024)、前期の古墳副葬鞆との比較検討が重要であると考えられる。稲部遺跡は、隣接する稲部西遺跡と併せた稲部遺跡群として知られ、近年の発掘調査によって庄内式期から布留式

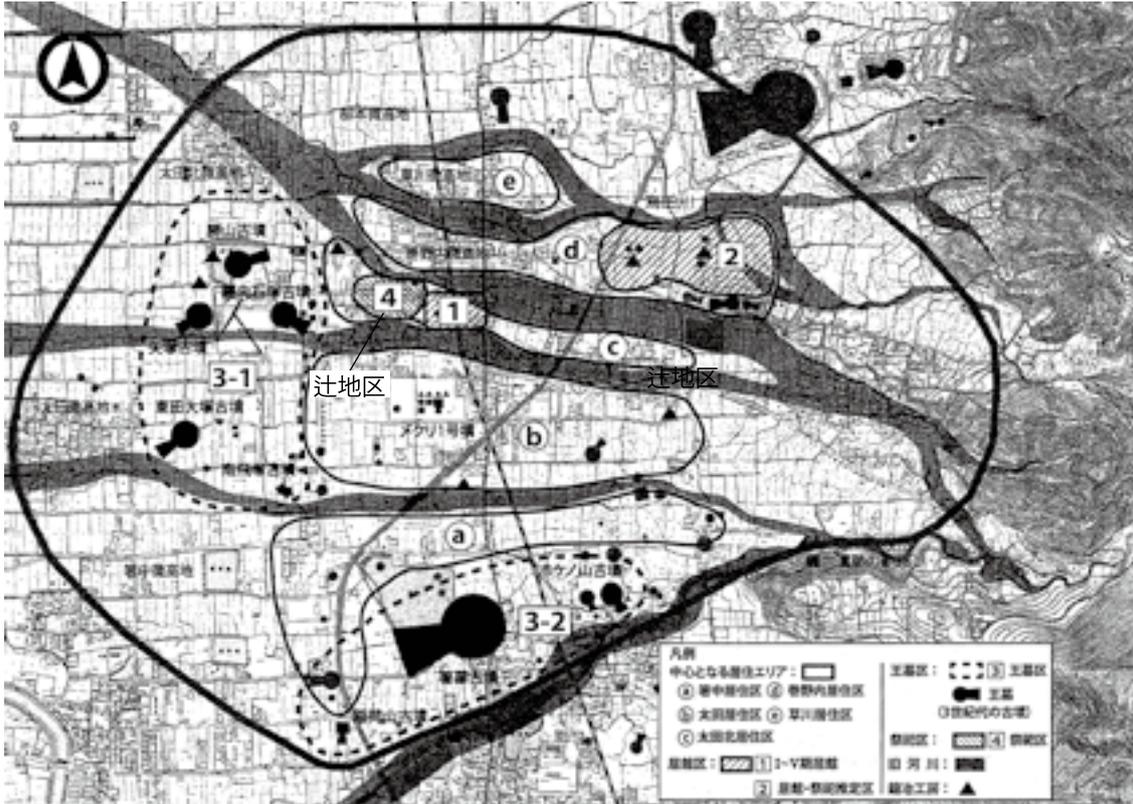


図1 纏向遺跡太田北居住区辻地区の位置

期初頭を中心とする大規模拠点集落遺跡としての様相が明らかになってきたが、稲部遺跡の靴の関連資料を調査する過程において、実見した纏向遺跡の筒状繊維製品と型式学的特徴、所属年代において少なからぬ共通点をもつことがわかり（戸塚ほか2024）、両者の比較検討が課題となってきた。纏向遺跡の筒状繊維製品とこれらの関連資料を比較することで、古墳時代初頭の近畿における絹糸を用いた繊維製品の様相、大和と近江の要所の政治的社会的関係性、当該期の対中国外交の様相や物証等の解明に寄与するものと考えられる。

## II. 筒状繊維製品とその出土状況

### (1) 纏向遺跡辻地区の位置

纏向遺跡は、これまでの200次を超える発掘調査成果から、南北約1.5km、東西約2kmと広大な面積を占める3世紀初頭から4世紀前半に存続した大規模集落遺跡として知られている。筒状繊維製品が出土した辻地区土坑10は、太田微高地とされる範囲の辻河道の南に面する微高地に位置する。また、橋本輝彦による集落構造の調査研究成果（橋本2021）に拠れば、辻地区は、太田北

居住区の西寄りに位置することになるが、太田北居住区から河道を挟んで南側の太田居住区とは一体の居住域として捉えられる可能性が高いことも指摘されている。

### (2) 太田北居住区・辻地区の調査（図1）

以下、太田北居住区とこれに含まれる辻地区の調査概要、土坑10の調査状況及び出土筒状繊維製品・土器について発掘調査報告書等（石野1976a、石野編2005、石野・関川1976）に拠って確認しておく。辻地区とその他の東田地区の昭和46～50年の発掘調査は、調査主体を桜井市、調査担当者を奈良県教育委員会・榎原考古学研究所とする調査体制で実施された。辻地区（西）の発掘調査は、県営纏向団地建設に伴い昭和46年10月4日～12月4日（5次・調査面積3,280㎡）、昭和47年7月18日～10月31日（7次・調査面積1,570㎡）に行われた。なお、これに先行する辻地区（東）の発掘調査は、雇用促進事業団勤労者住宅建設に伴い、昭和46年4月20日～6月1日（2次・調査面積1,540㎡）、同年7月10日～8月5日（3次・調査面積600㎡）に行われた。筒状繊維製品は、共伴した土器に伴うラベルの取り上げ



図2 辻地区遺構配置図

年月日「711028」という注記によると、5次調査中の昭和46年(1971)10月28日に出土したものと推定される。

太田北居住区では、庄内期から布留期古相の遺構が多く確認され、中央部の辻地区では庄内期古相から布留期古相の区画溝、柵とみられる柱列、大型掘立柱建物群が確認され、纏向遺跡の居館域と考えられている(橋本2014)。この居館域の西側では、庄内期古相から布留期古相の土坑群、掘立柱建物があり、突線鈕式銅鐸の飾耳片等が出土している。纏向3式期とされた土坑4等からは、土器と一緒に木製高坏、鳥船形木製品等の儀礼に用いられたと考えられる木製品が出土し、儀礼に用いた木製品等をおさめた祭祀土坑群とされる。祭祀土坑群は、東側の居館域に伴うものとみられ、本稿で紹介する土坑10もこの祭祀土坑群の一面に位置する。祭祀土坑群よりも西側一帯では、纏向石塚古墳、勝山古墳、矢塚古墳が築造されている。

太田居住区の北の巻野内居住区での50次・90次調査では、木槽と木樋を連ねた溝の庄内期新相の導水施設が確認された。筒状繊維製品に関連する繊維製品として、65次調査溝状遺構出土の「巾着状布製品」が出土した。絹糸の平織りで表面に漆が付く巾着状を呈し、時期は布留式期初頭である(橋本2013、橋本ほか2013)。

(3) 辻地区土坑10と出土筒状繊維製品・土器

**土坑10**(図2) 土坑10は、南側の古墳時代前期の旧河道と北側の古墳時代後期の旧河道の間に位置する。報告(石野1976a)によると、この土坑は、調査区端の排水溝掘削中に検出された。平面が不整形で、径1.0m余り、深さ80.0cm余りの土坑で、底は粘土層である。報告では「墳内には黒褐色土が堆積し、甕形土器の破片とともに筒状の編物製品が検出された。」とあり、「筒形編物」と甕形土器の伴出が確認された。この甕形土器を指すのかは不明だが、報告書掲載番号(図95中段右上1)の甕(10)の時期は、纏向3式期とされた。土器に伴うラベル及び土器の注記の取り上げ年月日は、どれも「1971年10月28日」であることから、土坑10の調査がほぼ1日ばかりで行われたことがわかる。

**筒状繊維製品**(図3) 筒状繊維製品の出土層位は定かでないが、甕形土器の破片と出土したとされ、報告書掲載表9によると下層で土器が出土しているため、埋土中の出土は確かであり、下層で出土した可能性は否定できない。繊維製品は、長さ25.0～25.7cm、幅12.5～13.3cm程度の長方形に石膏で周囲を固め、その内側の繊維製品と四周の灰色細粒砂(標準土色10Y6/1)の埋土ごとに取り上げられている。石膏の厚さは、左右側

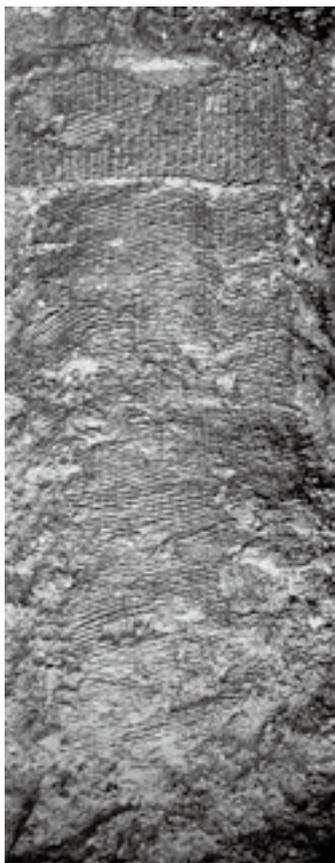


図3 土坑10出土筒状繊維製品

面で1.5～2.0cm、上部側は2.7cm程度、下部側は5.0cm、高さ約4.5～5.0cmである。乾燥しており、現状で見えている面が、出土時の上面であったとみられる。この面の実測図を作成し、断面図では土の上面のラインも示している。筒状繊維製品は、全体に規則的な組織が認められ、細長い織物、あるいは編物であることがわかる。繊維製品の表面は、織目の隙間や欠損部に砂が付着し、クリーニングによりさらに表面の観察が可能となる。光沢はなく、保存処理のための薬品等は塗布されていないようである。

繊維製品の状態は、報告書掲載の調査時の写真と比較して、当時の状態から大きく変形や劣化はしていないと推定される。

**土器** (図4) 土坑10出土土器<sup>2)</sup>はコンテナ5箱程度があり、土坑10の時期、ひいては筒状繊維製品の年代に大きく関わる土器群とみられる。これらの土器の内形態や時期の判然とするもの16点を摘出し、報告書掲載の甕(石野・関川1976、243頁図95中段右上1)を含めた計17点の実測図を示し、熟覧観察で留意されたことを中心に記述し、紹介する。ただし、報告書掲載図版21で出土状況の写真が掲載された土器との照合は困難である。

1は、口縁部外面に櫛描波状文と円形浮文を配し、内面に細密な縦ミガキを施し、垂下口縁となる二重口縁壺である。頸部全体を欠き、胴部への器形変化は不明であるが、肩部は竹管文帯と櫛描波状文帯を交互に配し、その下は細密な縦ミガキ調整である。明褐色～明黄褐色の色調・胎土で、伊勢方面からの搬入品とみられる。2は、頸部に刺突を施す貼り付け突帯をもち、その下の肩

部に斜格子状の沈線文をもつ広口壺である。肩部内面はケズリ調整であるが、方向は不明瞭である。明るい橙色の特徴的な胎土であり、西部瀬戸内系の搬入土器であろう。復元口径は19.1cmを測る。3は、端部が面取りされて口縁部が外反する山陰系の複合口縁壺である。復元口径16.4cm。外面には強い横ナデによる弱線状痕をよく残すが、内面は粗い調整である。浅黄橙色の胎土で、搬入品であろう。4は、東海系のヒサゴ壺の口縁部で、内外面は細密な縦ミガキ調整の精製土器である。胎土は緻密な黄橙色で、在地製だが、臨地しての製作と考えられる。5は、壺形土器底部で底面に浅い窪みを有する。底径5cm前後。6は、復元口径14cmの甕で、器壁は薄く作られ、口縁は真っすぐのびる。口縁端部はこころもち膨らませ、丸く収める。外面のタタキはほぼ水平に施され、6条/cmと細筋である。頸部直下までヘラケズリを施す。淡褐色の呈色。7は復元口径18cmを計測する甕で、斜め上に真っすぐのびる口縁部の端部は立ち上がりを見せ、やや丸味を持つ。胴部外面の器面調整は不詳であるが、内面は左回りに斜めケズリを加え、頸部直下は右回りで水平に削る。淡赤褐色に焼き上がる。器肉芯部は暗灰褐色を呈する。8は、甕の口頸部の破片。大型品で器壁は厚いものの、内面は削り込む。斜めに真っすぐ立ち上がる口縁部の端部を僅かに内側に摘まむ。多孔質で淡い灰褐色を呈する。口径の復元は避けた。9も甕で、小型ながらやや厚手、外面肩部は粗く右上がりタタキのち不整にナデを施す。内面は指ナデ、押さえ込むようなナデ調整。頸部内面下に粘土帯の接合痕や指圧痕を残す。口縁端部の内外面には強めのヨコナデ調整を施す。端部には細密なナデ条線が走る。庄内式期に下るが、弥生後期形甕の特徴を多くとどめる。色調外面は暗灰色～灰黒色。10は、報告書(石野・関川1976)掲載唯一の土器であり、普遍の特徴の認め難い甕である。実見し得ないが、外反する口縁部は横ナデ、肩部外面のハケはなく、体部外面は縦ハケのち上半横ハケで、内面上半は左回りの横ヘラケズリ、下半は縦ヘラケズリである。灰褐色を呈するとされる(石野・関川1976、243頁図95)。庄内式期新相とみられ、纏向3式でも新しい。11は、復元口径16cmを測る甕で、口縁部は内湾傾向をみせ、端部もやや肥厚させるが、布留式甕ではない。胴部外面に右上がりのタタキを施し、縦に細密なハケを被

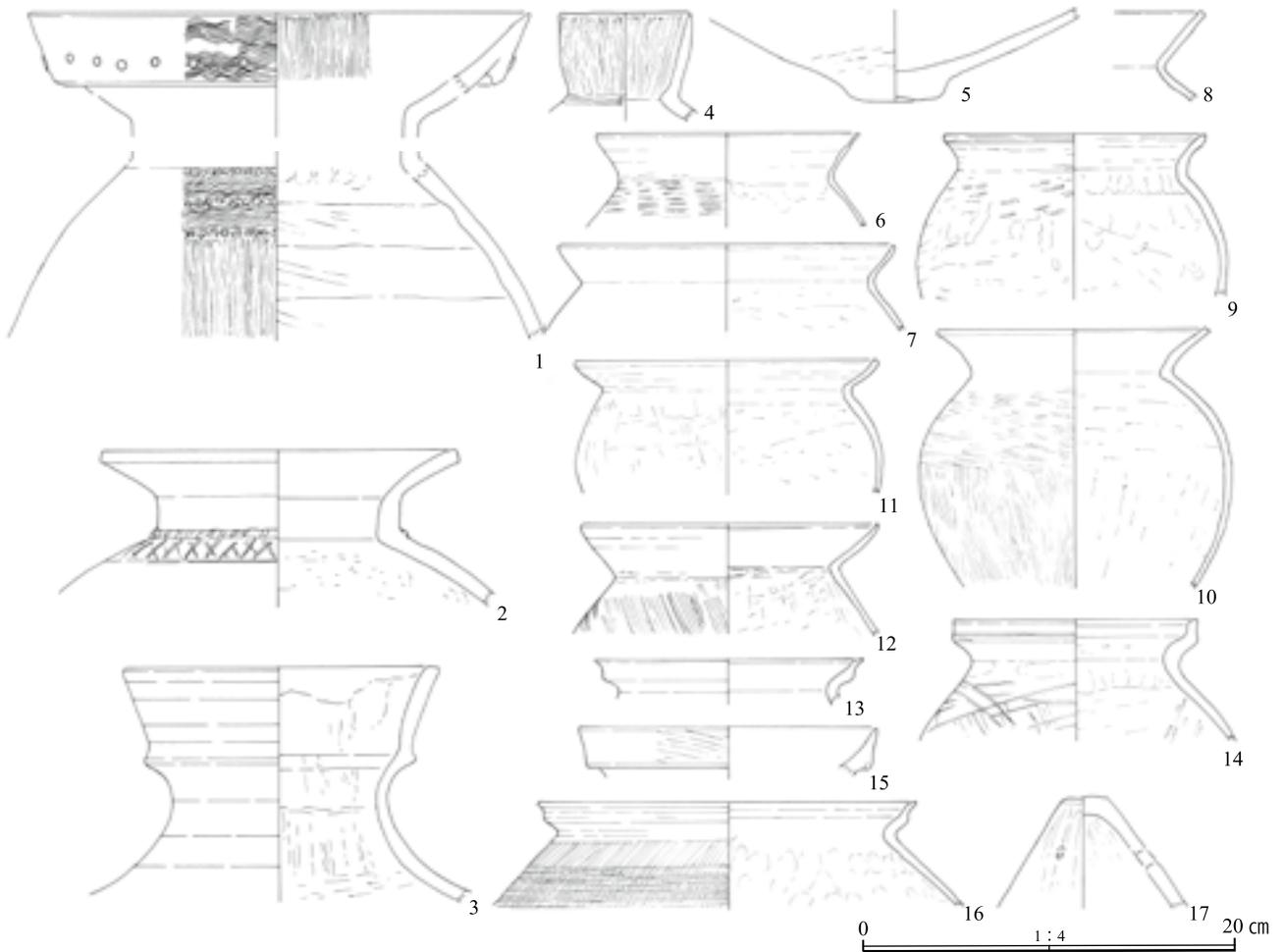


図4 土坑 10 出土土器

せる。内面は右回りのヘラケズリを施すが、器壁は厚い。風化雲母片・長石粒を多く含み、外面は明黄褐色の焼き上がり。12は、甕。復元口径は16cm前後。内面斜め右回りのヘラケズリ、器壁は頸部を除きシャープに仕上げられる。外面は比較的粗いハケ仕上げ。内湾ぎみの口縁部の端は若干摘み上げる。外面橙色、内面は浅黄橙色。器質は極細粒砂。石英・長石などの鉱物粒が目立つ。13・14は、受口状口縁甕である。13は、復元口径14.4cmを測り、口縁端部が斜め外方へ強く引っ張られて尖り気味となり、上面が水平な面をなす。浅黄色の胎土で、断面の芯部は黒褐色となる。口縁部断面形と胎土の特徴から、近江湖南の搬入品とみてよい。庄内式期新段階に併行する。14は、口縁端部が斜めに内傾する面をもち、外面に1条の沈線を施す受口状口縁甕である。復元口径13cmを測る。肩部にはヘラによるいわゆるクロスハケが施される。頸部内面は右回りのケズリ、肩部内面は横位の弱いヘラケズリの後、口縁部側に向かってのやや強

めのヘラケズリ調整である。浅黄橙色の胎土で、チャートを含み、近江湖東の搬入品であろう。口縁端部の外方への摘み上げが強く、端部がやや尖り気味になり、筆者分類のⅡ段階c1型式（戸塚2018）に相当し、庄内式期新段階に併行すると考えられる。15は、端部が上方へ丸く尖り、口縁外面にはやや凹凸があるハケ状擦痕がみられる北陸系の有段口縁甕である。越前との関連が考えられるが、橙色の胎土で、在地製と推定される。16は、S字状口縁台付甕、尾張からの搬入とみてよい。復元口径20cm前後になり、暗灰黄白色を呈する。口縁部の形態は、完成期のS字に成りつつあるものの、まだ達成しないが、胴部は強く張り出し、外面には斜め右上がりの粗いハケ、肩部には横走る強いクシ平行条線が認められる。内面は指頭による調整圧痕が残る。頸部付近には媒化痕が2～3cmの幅で顕著に存する。器壁は3～4mmと薄く、黒色の芯を有している。17は、透かし穴が上寄りに位置する高坏脚部である。この他に、低脚高坏

の脚部片1点を確認しているが、図化していない。

### III. 纏向遺跡辻地区土坑10出土土器の年代

#### (1) 土坑10出土土器の出自と時期

MT 4G16C 土坑10出土土器(図4)の全貌を確認した結果、報告書(石野・関川1976)掲載の1点の甕のみと考えていたが、未掲載の土器がかなりみられたため、実測調査を行い、個体ごとの観察所見については前述したとおりである。本項では、これらを安定した土坑一括資料であることを前提に共時性について検討し、下限土器の年代観を示すことによって筒状繊維製品の帰属時期について言及する。

加飾豊かな壺1は、頸部を欠くためその長さももっと短くなる可能性をもつものの、庄内式後半の時期を与えてよい。西部瀬戸内系と推測した広口壺2は、畿内にはない形態と文様を有し、周防西部出自と考える。体部の球形志向や低い突帯、狭域な文様帯から、庄内式後半段階に併行する。山陰系の複合口縁壺3は、心持ち外反して開き器壁は厚く頑丈。口縁部の下端が外方に突出する特徴などを勘案し、出雲西部産で布留式古段階併行期とみられる時期を占める。ただ、似た複合口縁壺は壺G2など近江南部にも存在し、日本海経由の影響を受けた蓋然性は大きい。4は短頸の小型ヒサゴ壺で丁寧な作りで内外面のミガキ幅も狭いのが特徴をなし、体部は下半の低い位置に重心がきて張り出すと考えられる。廻間遺跡分類の壺C4の6期に該当する。廻間Ⅱ式期の後半に位置し得よう。S字状口縁付甕16は、口縁端部の面取り様の調整が不明瞭になるもので、S字甕B類新段階後半の様相。廻間2～8期は赤塚廻間編年では廻間Ⅰ～Ⅲ期に大別されている(赤塚編1990)。本例は体部の器壁は3～4mmと薄甕化しており、C類古段階のような頸部調整は行われておらず、S字甕でも廻間Ⅱ式期の末に遡るものであろう。右上がりの鋭い独特の粗いハケ調整が施され肩部のクシを用いた平行線文は頸部直下より降りて間隔を保つ。実年代は0・A類が2世紀を占めるのに対し、S字甕B・C類は3世紀に盛行する。該当期は近畿に始動した東海S字甕の第二次拡散期で、特に纏向遺跡ほか陸海路の交通の拠点遺跡を志向した近畿への移動ベクトルが著しくなる時期であり、西暦250年前後の年代が与えられる。小型鉢・小型丸底壺・小型器台

などの典型布留式期段階の小型精製土器類が目立って伴っていない様相にも留意して推考するなら、この土器群全体の様相は古く、布留式古段階での位置付けはできない。2点示した近江型の受口状口縁甕(13・14)は、近江系模倣甕ではなく、近江産甕の搬入品である。明確に区分し得るものであり、近江からの直接的な人の到来を明示するもので、本資料(筒状繊維製品)の来歴の問題を広域的な技術的交流の関連性から考えるに際して、実に貴重な位置を占める外来系土器として再認識した。13は器形や製作手法、色調・胎土・焼成の諸要素から湖南野洲川流域(旧野洲郡域・栗太郡域)で製作された甕の口縁部とみて大過はない。器壁芯部の低温暗色部を持つことや外傾する二次口縁部には丁寧なヨコナデを加えており、外端部をつまみ出す点に時期的特徴が表出する。琵琶湖沿岸の他地域よりシャープな造作をなすので、識別しやすい。最近「野洲型甕」と呼ばれる強固な在地色を示す列点受口のもの(伴野2024)との系譜に異同がみられるものの、精製の土器は湖南を中心に認められる。14は湖東産の搬入品であることを強調したが、下地無文化で肩部にX状に粗いハケを加えるもので、守山市下長遺跡の隆盛期ではこの種の甕が54%の高い比率を占めている(伴野ほか2001)。14については湖南の同型式甕より器壁が厚く、彦根・東近江周辺の湖東産甕と思われる。

本土器群の中にあって、多くを占める大和在地産の「く」の字状口縁甕は、口縁形態(外反化傾向9・10、直線化傾向6・7、内湾化傾向11・12)や器厚数値、内面ヘラケズリの有無、回転ケズリの範囲や左回り・右回りなどの方向、下半のタテケズリの範囲、器面二次調整のありよう、口縁端部の造作テクニックなど、多様な属性比較による違いがあり、弥生後期型甕、庄内式甕、纏向報告における甕C(石野・関川1976)などが包括されるが、ティピカルな布留式甕を含んでいない点が重要である。投棄段階の同時性は容認し得る範疇のものであり、これらの土坑資料を庄内式期の最後に置くことは許されるであろう。このように甕には型式学的な新古の様相差が窺われるが、脈絡の取り付けが難しいハケ甕の10も含めて、一括投棄された年代が一斉時の行為として揃う資料と考えてよからう。

## (2) 占有率の高い外来系土器の存在と盆地内の土器

纏向遺跡には東海系の柳ヶ壺を典型品とする忠実模倣品が存在する。遠隔からの外部集団の到来と定着を示すもので、搬入品のように畧重的な時間ステージに則した持続的な入り方とは異なり、在地化の程度の違いが入植者の地域・様式によっても異なっているが、この土坑資料にも忠実模倣品に近似する弛緩度のみられる臨地製品がみられることは見逃せない点である。土坑資料の搬入率を問題にするには資料母数が僅少であるものの、纏向遺跡の中でも平均を超えた外来系土器の様相が卓越しており、地域を異にする日常土器の併行関係を重視した検討が行い得る点でも重要な在り方を示していると言えよう。その点、東海西部地域の様相は半数を占めるような実態は認められないものの、顕在化の時期を示している。16のS字状口縁台付甕は廻間遺跡SK30出土資料を基準とする廻間Ⅱ式第4段階前後の資料であり、廻間遺跡6期新相、旧来の元屋敷(古)であり、纏向3式後半に併行し、加賀の土器との接触はないものの北陸西部漆町7群とおそらく併行する。16は濃尾平野のS字甕特有の器形・製作手法(器面調整)を採り、S字甕B類からC類に転換する過渡期の小期に比定される。纏向遺跡の在り地甕は6～12の7点を数え、図化資料の過半に達しており、搬入品・臨地製品・模倣品の外来系土器との共時性を検討する上に避けられない実態を明示する。甕が多いのは偶発的なものではなく、在地の器種構成でも壺が全体的に減少する趨勢に見合う様相と言えよう。これらの甕は口頸部～体部上半のみ実測された資料が多く、完形復元できる土器はみられないが、典型的な河内型の庄内式甕やその後に出現する布留式甕は認められない。その結果、すべてが庄内式期の新段階に製作されたものながら、器形・製作手法に著しくバリエーションが存在する。中には寺沢編年による布留0式甕(寺沢1986)としての範疇で理解可能な口頸部形態も存在し、基層属性は広義の『纏向』分類(甕C)に該当するものも包摂している。明らかに弥生後期形甕を出自とする例は器壁も厚く(9～11)、口縁部は外反するもの、弱い内湾化を示すものがみられる。いずれも体部成形は右上がりタタキが施されている。さらに口縁部の特徴は変化に富んでおり、庄内式甕の属性を持ち、相当に薄くケズリ込まれた6・7の口縁部は体部同様薄い仕上げで、直

線化して口端を摘み上げているが、内湾化傾向を帯びる12などは器体外面を斜めハケ掛けで最終調整をしており、より進化型の属性を保持し始めている。

なお、全体を通じて、器種では小型器台・小型丸底壺や手焙などを欠き、吉備・阿波・讃岐や河内・播磨・淡路・摂津・山城・但馬・丹波・丹後・紀伊・伊賀などの土器は注意しつつ見たものの、認め得なかった点も付言しておきたい。

## (3) 辻地区土坑 10 土器群の性格と編年の位置

辻地区土坑 10 の土器群は、同地区土坑 4 下層土器群のようなポピュラーな土器編年上の取り扱いが試行されていない。それは未報告の土器の存否について、報告者を含め、土坑の機能時期に関する認識が低かったからである。今般、筒状繊維製品の形態や用途、素材や製作技術に関する紡織研究面での深まりや着目がなかったなら、筆者らも土器の存在をここまで執拗に調べることはなかったかもしれない。結果として、繊維製品の性格付けと帰属時期の提示のために再検討の必要な精査対象となる土器群であり、東海・北陸から西部瀬戸内の地域に拡散する範囲の人々との交流の証左とみなし得る外来系土器の存在とそれらの共時性が無理なく確認できた。遠隔地の土器が多面的に比較的ダイレクトに流入する現象を纏向遺跡の活動の根幹たる特質とするなら、それがこの土坑資料にも十二分に反映されている点に留意すべきだろう。列島に拡がる多くの地域が個別遺構にかくも関わっている事実は、単なる廃棄土器群ではなく、この繊維製品を伴う土器の投棄祭祀が広域に渡る集団の関与の下、実修されたことを示唆する。それは畿内産、あるいは大和盆地東南部産の土器でさえ客体化させる動きに思わしめる。このところにこそ、古墳時代の始まりや前方後円墳の出現に特徴付けられる社会の変革と関わる能動的な投棄の祭祀が結節、終焉の場として表現されているとみたい。

当土器群は辻土坑 4 下層の土器群、纏向 3 式後半の範疇で理解できるものであり、同上層土器群に接近しつつあっても峻別されるものといえ、布留式土器の様相には至っていないことが判明した。近江湖南地域の伴野編年で様相を比較すれば(伴野2024)、野洲川Ⅶ期古段階前半と近江産搬入品を介して僅かながら接点を持つ。長

らく収蔵庫で眠りに就いていた貴重な繊維製品の時期は、既報の甕 10 によって纏向 3 式の時期として知ることが可能であったが、この同伴土器類を新たに紹介した

ことによって、その帰属時期を確実に限定できるようになり、同期にあってもより新しい小期の中で捉えることが可能となった。下限となる資料に交差編年上の位置が

併行関係として明瞭なものを含み、他方において既往の土器編年を覆す関係性はない。

また、暦年代に関しても、紀元 180～190 年を始期とする庄内式期の新段階とみてよく、250 年前後を始期とする布留式期の直前の時間帯、すなわち 240 年前後の資料と考えておきたい。

#### IV. 筒状繊維製品の型式学的特徴

##### (1) 筒状繊維製品 (図 5・6・7・8)

繊維製品は、短軸の狭い方を上、その反対側の幅広い方を下とした場合、残存長 20.2 cm、上端部で 7.9 cm、下部で幅 8.2 cm を測り、裾広がりの方角である。上部は織目の異なる組織が 2 枚重なる部分があり、幅 3.6 cm の組織が下の異なる組織の上に貼りついた様子が認められる。上に貼りついた組織は左上端が大きく欠損し、この欠損部では下の組織の織目が広い範囲で認められる。上に貼りついた組織の下端部は、<sup>たていと</sup>経と同様な糸でかがっており、織物の端部とみられる (図 8-1・2)。両側面は欠損せず、やや丸い角を成して下の土中に潜りこんでいる (図 8-3・4)。

上端部の組織が 2 枚重なる部分より下方は、1 枚の織物とみられ、この部分が繊維製品の



図 5 筒状繊維製品平面図・縦断面図

本体とみてよいだろう。中央には幅約 6.0～10.0 mmの横方向の亀裂があり、亀裂部の左隅では幅約 10 mm、厚さ約 7 mmの炭化材が遺存する。また、径約 1.5 cmの欠損部が数箇所で見られる。右下には縦 1.9 cm、横 2.4 cmの欠損部があり、この部分では外側とは異なる組織が下層に認められる（図 8-8）。下部は斜め方向に欠損し、本来は下方に向かって更に長く伸びていたとみられる。右端から 2.0～2.5 cmの位置では、上半部から下半部にかけて縦方向のヒビ割れがあり、これと対称的な位置である左端から 6 mmの位置でも上半部に縦方向のヒビ割れがある。これらのヒビは、繊維製品の隅部近くにあり、断面形における角部付近に生じている。

両側面は一部を除いて欠損せず、上端部の組織と同じようにやや丸い角を成して下の土中に潜りこんでいる。土中の部分は確認できないが、繊維製品の横断面形は、上半の中央部が隅部より約 10 mm盛り上がり、空洞をもつ筒状の繊維製品であると推定される。縦断面形は、上端から上半部は緩やかに隆起し、大きな亀裂のある中央部から下部にかけてはほぼ水平である。上端部の横断面形は、隅が丸く、わずかに窪む程度でほぼ水平な形である（図 6 A-A'）。一方、上端部より下位の横断面形は、上半部で中央部が盛り上がり、下半部は土に埋もれて確認が難しいものの、上半部ほどの隆起はなく、表面側にやや膨らんだ断面形とみられる（図 6 C-C'）。現状の断面形から見て、隅部の断面形の特徴は各位置で共通することから、土中での変形は考慮すべきものの、隅部では本来の断面形をある程度残している可能性が高い。一方、中央部は大きく盛り上がり、土中での環境など様々な要因で本来の形態から変形している可能性がある（図 6 B-B'）。製品の上下が重なった遺存状態が想定されるが、土中で変形する前の対称的な形であると考えれば、一つの案として、胎の厚さは約 2.1～2.5 cmの推定にとどまるが、角がやや丸い隅丸方形の断面形に復元できる可能性が考えられる。

次に、繊維組織を観察すると、繊維製品は綾杉文様の織目、平行する織目の 2 種類の組織があることがわかる。前者の綾杉文様の織目は、上端部を除く繊維製品の広範

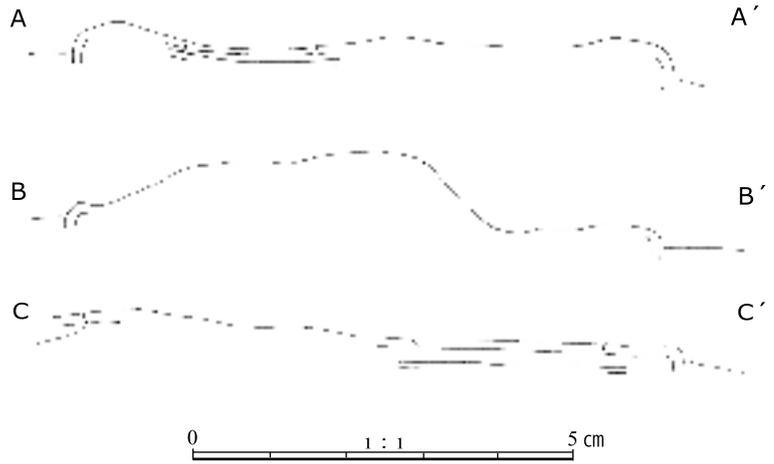


図 6 筒状繊維製品断面図

囲にみられる織目であり（図 8-7）、綾杉文様の三角形の頂部が 7 つ連続して確認できる。繊維製品の本体部外面の主体となる織組織として見てよい。この組織は、<sup>たていと</sup>経が密に表れて<sup>よこいと</sup>緯はほとんど目立たない。組織としては、経が緯を 2 本越し、交差する織組織、すなわち、綾織物によるものと考えられ、綾杉文様を織り出す。綾織物の外面は、経 1 本が緯 2 本を越し、次に 1 本沈む、1 単位が 3 本で構成される「経三枚綾」（鈴木 2005）となる。経の織密度は 19～30 本/cm、経織目の長さは 2.5～2.8 mm、幅は 0.7～0.8 mmである。糸はおおむね S 字撚りである。

後者の平行する織目は、上端部で綾杉文様の織目をもつ繊維の上に重なる別の繊維、右下の欠損部で下層にみられる繊維に見られ、経の織密度は 30～31 本/cm、経の織目の長さは 1.5～2.0 mm、幅は 0.7～0.8 mmである。緯の織密度は 4 本/cmである。これは「緯三枚綾」（鈴木 2005）の織目であり、綾織物における外面の「経三枚綾」に対する内面の織組織とみられる。2 種類の織組織は、織物の表裏の関係を示す可能性が高いと考えられ、このように理解すると、繊維製品の構造に関わる重要な点が明らかになる。一つは、綾織物の内面とみられる上端部の平行する織目をもつ組織が見える部分についてである。これは、本体にみられる綾杉文様の織目をもつ外面から、筒状となる繊維製品の開口部を外方に 3.6 cm以上の長さで折り返した部分とみなすことができるのではないかと。そのために、外方へ折り返した織物の内面の織組織が露出したものと考えられる。このように、開口部が折り返されていたとすると、ある程度の伸縮性を



図7 筒状繊維製品(現状)

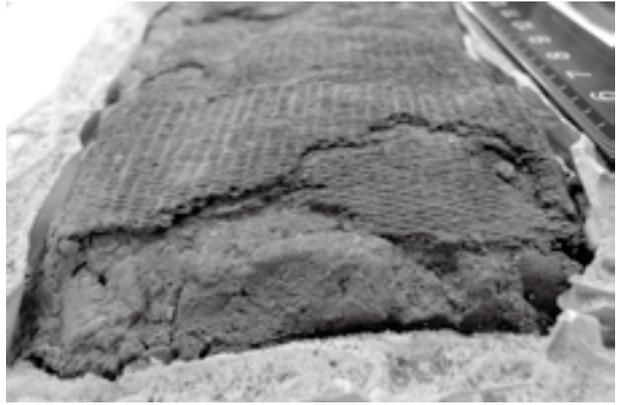
もった製品であったと考えられる。このことは、前述したように、上に貼りついた繊維の下端部が織耳となり(図8-5・6)、織物の端部とみられることと整合する。

もう一つは、右下の欠損部から覗くことができる平行する織目(図8-8)についてである。前述したように、この織目を綾織物の内面と認めることができるならば、欠損しない部分では綾杉文様の織目を基本とすることから、一部では2枚の織物が重なっていることが想定される。この場合、両側面が下方の土中に潜り込んでいることもふまれば、やはり中空の筒状繊維製品であったと考えることが可能であろう。調査当時の「筒形」という表現は、今回の観察所見とも矛盾しない。中空の繊維製品が土中で押し潰されたことによって、繊維製品の出土時の上面側である上層と出土時の下面側である下層が折り重なるようにして土中で残存した状態を示す可能性が高いと考えられる。この点は、繊維製品とその周辺部のクリーニングによって、さらに検証に向けた情報が得られると期待される。

前者と後者の経は、分析機器を用いた断面での観察等を行っていないため、厚さや断面形が不明であるが、ともに幅は0.7~0.8mmであり、絹糸である可能性は否定できない。織組織の特徴、共通する細糸を使用していることからみて、一連の織物として製作されたものと考えられる。外面全体は灰色(標準土色帖N4/)を呈するが、水分を含んだ出土時はより黒色に近かったことが推測される。素材としての絹糸の使用、漆の塗布等は、今後の自然科学的分析による検証が必要である。きわめて脆弱な繊維製品が幸いにも形状を留めていたことは、現地の地下水位や漆の塗布と少なからず関



1 開口部



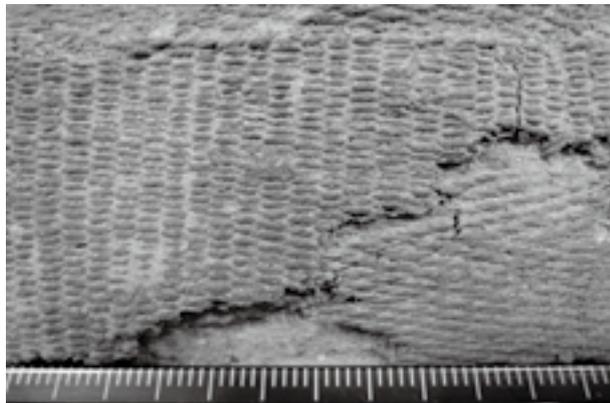
2 開口部破断面



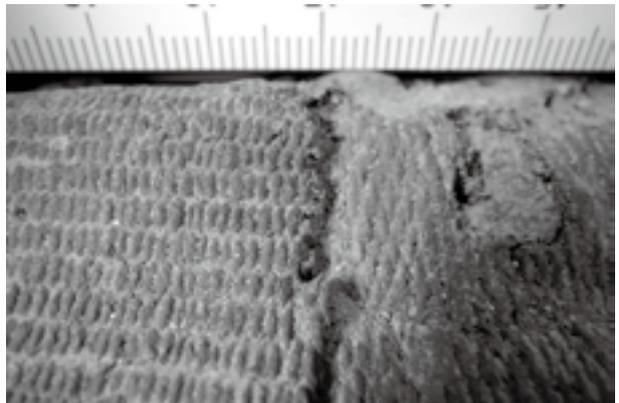
3 開口部側面



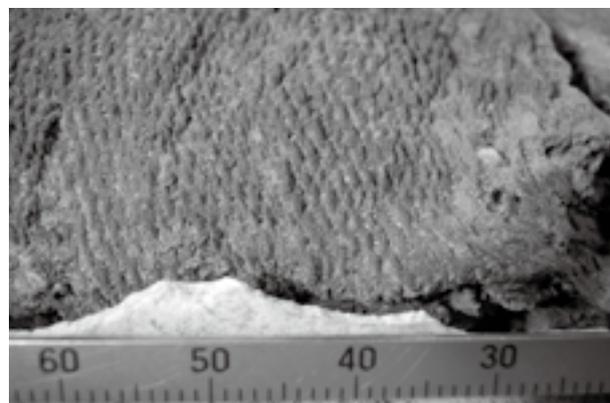
4 開口部の破断面と側面



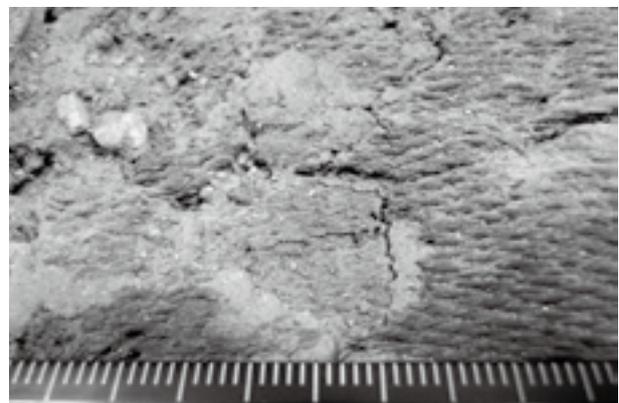
5 推定折り返し部内面と上層外面の織組織



6 推定折り返し部内面と上層外面の織組織



7 左端部上層外面織組織



8 右下部下層内面織組織

図 8 筒状繊維製品の細部

係する可能性もあろう。

## (2) 型式学的特徴

**平面形** 幅 7.9～8.2 cm のやや裾広がり の長方形を呈する。上下端部は欠損し、本来はより長い繊維製品であったとみられる。ただし、上端部が外方へ折り込まれたとすると、上端の欠損部から開口部にかけてはそう長くはならないと考えられる。一方、下部は裾に向かってやや広がる形と推定される。

**断面形** 前述したとおり、繊維製品は中空の胎をもつ製品である可能性が高い。出土時に上面となっていた確認できる部分から復元すると、角が少し丸い長方形の断面形と推定される。

**織組織** 織組織は、いわゆる綾織物であり、外面に綾杉文様が織り出され、内面は平行する織目となるのが特徴である。織密度は、前述したように、経の織密度が 19～30 本/cm と細かいものである。

**素材** マイクロスコープによる観察<sup>3)</sup>によると、外面、内面ともに経糸は太さ 0.7～0.8 mm、おおむね S 字撚りの細糸の使用が確認される。上層の下端の欠損部で、茶褐色の緯がわずかに確認できるが、素材については不明である。経と同じ、絹の可能性もある。今後、破断面での断面観察等によって経と緯の素材が明らかになる可能性がある。

**構造** 土中では中空部分が潰れたことで 2 枚の繊維製品が重なっていると想定される。このような出土状態の場合、出土時の上面の繊維製品を「上層」、出土時の下面の繊維製品を「下層」とし、織組織は綾杉文様をもつ「外面」とこれに対応する平行する織目の「内面」と定義して区別することができる。本例の現状は、上層外面が広く認められ、右下の上層の欠損部では下層内面の織目が認められることになる。また、上部では折り返されたと想定される上層内面が確認できる。中空の繊維製品の開口部にあたる上端部は、外方へ折り返されている可能性が高いとみられ、断面が角の少し丸い隅丸方形で、裾広がり の細長い製品とみられる。下端部からはさらに長く伸びていたと推定され、全長は少なくとも 50～60 cm 以上になると推定される。製品としては、筒状を呈して胎をもつ何らかの入れ物であると想定される。

## V. 纏向遺跡出土筒状繊維製品と稲部遺跡出土鞆の型式学的検討

### (1) 諸属性の比較

纏向遺跡出土筒状繊維製品の類例として、時期が近く、共通点を有する繊維製品である稲部遺跡出土鞆 1 号横帯 (図 9)・2 号横帯<sup>4)</sup> (図 10) の諸属性との比較検討を行う。稲部遺跡出土鞆については、稲部遺跡 19 次調査 SD02 において、形態と織組織が共通する同一個体の鞆の二つの帯状部分である 1 号横帯、2 号横帯がまとめて出土した。時期は、SD02 出土土器 (図 11) からみて庄内式期新段階末と考えられ、下限は布留式期初頭である。暦年代は、3 世紀第 2 四半期末であると考えられる (戸塚 2022、戸塚ほか 2024)。

**平面形** 稲部遺跡出土鞆は、1 号横帯、2 号横帯の 2 本の横帯とその周辺の残欠であるが、鞆として矢筒部の形態を考えてみたい。まず、1 号横帯は、長軸側の両端部をかがっており、それぞれが織耳となり、横帯としての長さは 19.5 cm<sup>5)</sup> である。また、2 号横帯にはループ状の織物による紐通し (図 10) が伴う。紐通しを伴う 2 号横帯は幅 15.1 cm 以上だが、福井市鼓山古墳出土鞆等で紐通しが鞆の矢筒部開口部のやや下の横帯、あるいは矢筒部中位よりやや下の横帯に伴う例が散見されるため、2 号横帯は 1 号横帯よりも下位に位置すると推定できる<sup>6)</sup>。よって、2 号横帯は、1 号横帯と同じくらいの長さかそれ以上であると推定されるが、後者の可能性が高いだろう。翻って、1 号横帯の位置であるが、長軸側の両端部が織物の端であり、一枚の帯として完結している。矢筒部の最上部あるいは蓋等として鞆に備わる帯状の部品等が想定されるが<sup>7)</sup>、矢筒本体部にこうした横帯を縫い付けることが可能であるのか、鞆の構造と製作技術を考えるうえで様々な問題が想定される。いずれにしても、1 号横帯は矢入れ口に近い部位であろう。

稲部遺跡出土鞆の幅は、少なくとも 19.5 cm 以上であり、底に向かって裾広がりとなる鞆の基本形態をふまえると、鞆の下位から底にかけての幅はもう少し広く、約 25 cm 前後になると推定される。矢筒部の長さも問題となるが、弥生時代から古墳時代前期の矢の長さも勘案し<sup>8)</sup>、ひとまず 60 cm 以上と推定しておく。稲部遺跡出土鞆は、このように纏向遺跡出土筒状繊維製品よりも幅は

広く、裾広がりの方形状であったと推定される。両者の幅に差はあるが、平面形が方形状である点は共通し、ともに裾広がりになる繊維製品と考えられる。

**断面形** 稲部遺跡出土鞆 1 号横帯は、土中で潰れずに残っており、断面形は両端部の角に弱い稜をもつ長楕円形で、厚さは 2.4 ~ 3.0 cm を測る。2 号横帯もこれに準じる断面形と厚さであると考えられる。両者の断面形（図 12）は、薄い方形状あるいは長楕円形であり、胎の厚さも近似する点は注目できる。

**織組織** 纏向遺跡出土筒状繊維製品、稲部遺跡出土鞆の織組織は、両者ともにいわゆる綾織物であり、外面によく似た綾杉文様が織り出されるのが特徴である。内面の組織も平行する織目で同様である。ただし、稲部遺跡出土鞆 1 号横帯は 2 条、2 号横帯は 3 条の突帯が縫い付けられるが、纏向遺跡例ではこうした突帯はなく、異なる点もある。また、2 号横帯の 3 条の突帯がある幅 1.4 cm の範囲では突帯と平行する市松文様の織目となり、綾杉文様の織目でない部分がある。

**素材** 稲部遺跡出土鞆では、経として S 字撚りの絹糸が、緯として種類は不明であるが植物繊維が確認されている。一方、纏向遺跡例では不明な点があるものの、両者は経に S 字撚りの細い糸を使用する点では共通する。纏向遺跡例においては、顕微鏡観察、自然科学的分析による経と緯の断面形の観察と素材の検討も必要だろう。

**構造** 纏向遺跡出土筒状繊維製品と稲部遺跡出土鞆は、

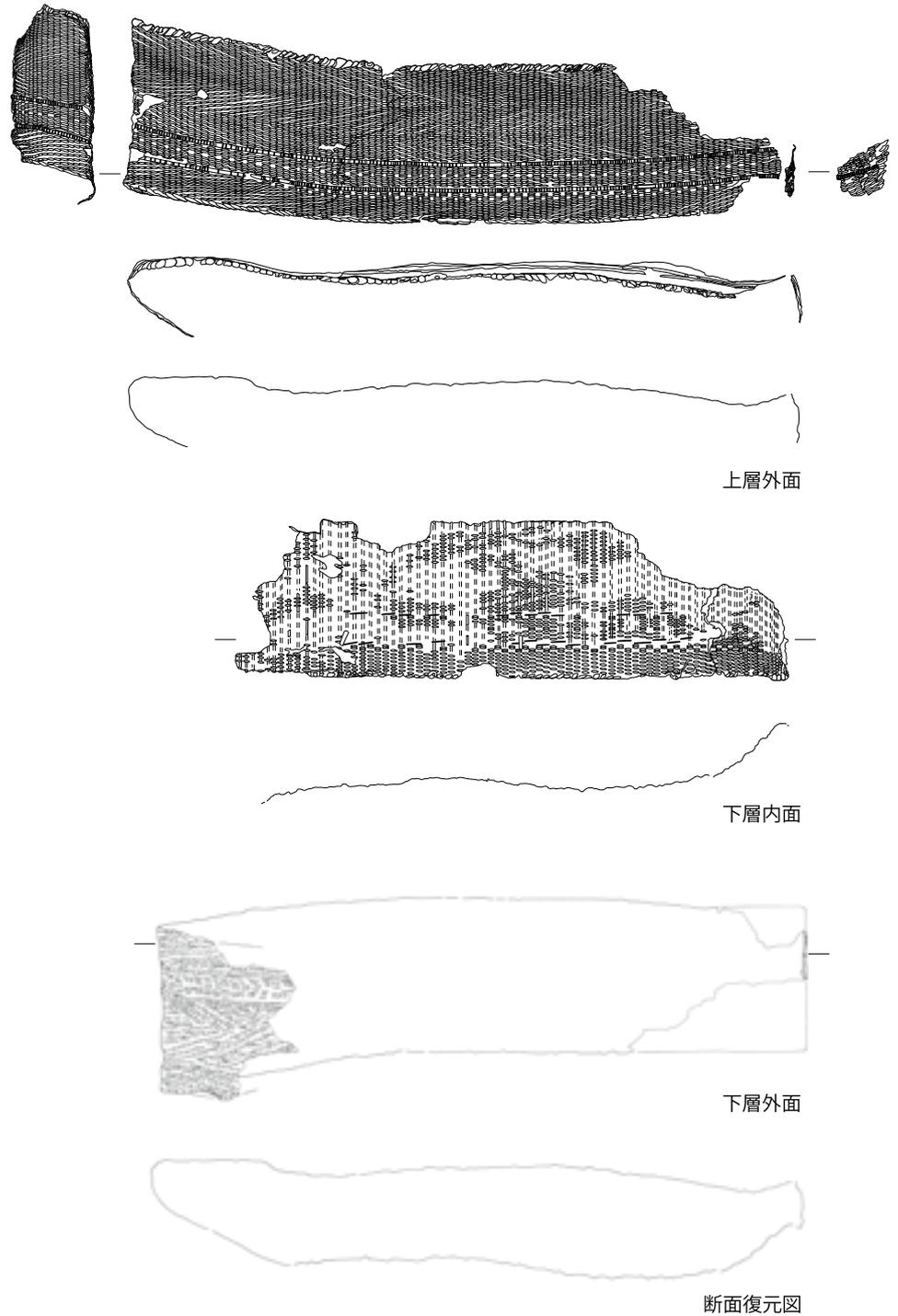


図 9 稲部遺跡出土鞆 1 号横帯

幅と長さ、横帯の突帯と紐通しの有無で差異はあるが、扁平な中空の胎をもち、開口部側がせまく、基部に向かって裾広がりとなる細長い繊維製品とみることができる。綾織りによる織組織、経の素材も同様なものであり、繊維製品としての基本的な構造はかなり近いものであると理解できる。そして、纏向遺跡例は、こうした基本的

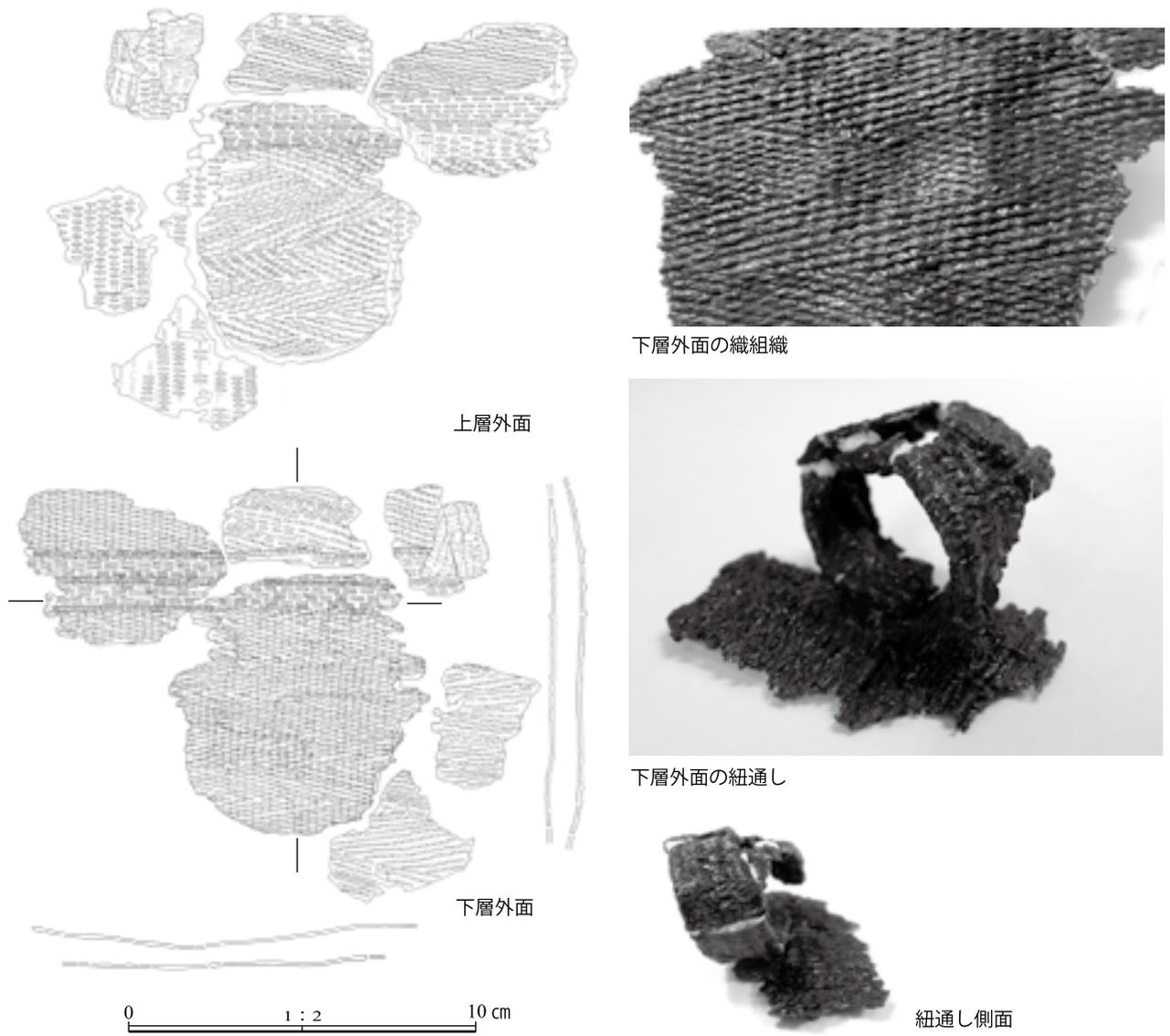


図10 稲部遺跡出土鞆2号横帯

な構造をもつ繊維製品の開口部側の端部を外方へ折り返したものである可能性が高いと考えられる。

## (2) 小結

以上、纏向遺跡出土筒状繊維製品と稲部遺跡出土鞆1号横帯・2号横帯について、平面形、断面形、織組織、素材、構造から比較検討を行った(表1)。この比較によると、両者は、寸法やプロポーションにやや違いはあるが、全体の平面形、断面形はよく似ており、織組織もきわめて近似する織物から成る繊維製品であることがわかった。纏向遺跡出土筒状繊維製品の緯の詳細は不明であり、経の素材も不明だが、両者ともに経は同様な細いS字撚りの糸を使用している。諸属性の比較から、纏向

遺跡筒状繊維製品は、稲部遺跡出土鞆と共通する複数の属性を備え、筒状の胎をもち、裾広がりの方角を呈する繊維製品であると考えられる。以上の比較検討により、纏向遺跡出土筒状繊維製品は、稲部遺跡出土鞆とは細かい点は異なるものの、いわゆる鞆として認められる可能性をもつ繊維製品であると結論付けられる。さらに後述するが、織組織、形態において古墳時代前期の古墳副葬鞆とも共通する属性を備える点も重要である。

## VI. 纏向遺跡出土筒状繊維製品の組織の特徴と製作技法—「巻き」仕上げの鞆、「編み」「織り」仕立ての鞆—

### (1) 縦横素材と製作技法

この筒状繊維製品の経が、稲部遺跡例（戸塚 2022）と同様に絹であれば、糸に撚りがかかっている事実は重要である。なぜなら、弥生～古墳時代にみられる絹織物は、一般的に撚りがほとんどかけられていないからである。纏向遺跡（第 65 次調査）で出土した巾着状布製品は、平織の絹であることが判明している（橋本ほか 2013）。経・緯ともに無撚りで絹織物としては一般的な特徴を示している<sup>9)</sup>。古墳時代前期において、撚りのかかった絹糸は、鞞をはじめ、楯、刀装具など武具の製作によく用いられることに注意したい。以下、本例を鞞とみた場合の製作技法を検討する。

鞞は、矢筒本体の表面に表される文様により、7タイプに分けられる（杉井 1996）。このうち、出土例が多く、科学分析等によって一部の材質が判明する、雪野山タイプ、会津大塚山タイプ、鼓山タイプを主に取り上げる。

雪野山タイプの指標とされる、東近江市雪野山古墳例（棺内鞞）は、撚りのかかった絹糸を革製の本体に巻き上げて、その重なりにより菱形文様をあらわす。菱形の外形には径 1.5～1.8 mm の太糸、内部に径 0.7～1 mm の細糸が使い分けられ、いずれも Z 字方向に撚られた絹糸である（杉井 1996）。同じく、胎内市城の山古墳例（南鞞）でも菱形文様を構成する 2 種類の糸の痕跡が観察され、太糸は径 1 mm 以内で絹の可能性があり、細糸は径 0.4 mm 前後で絹と判断されている（本吉 2016、四柳

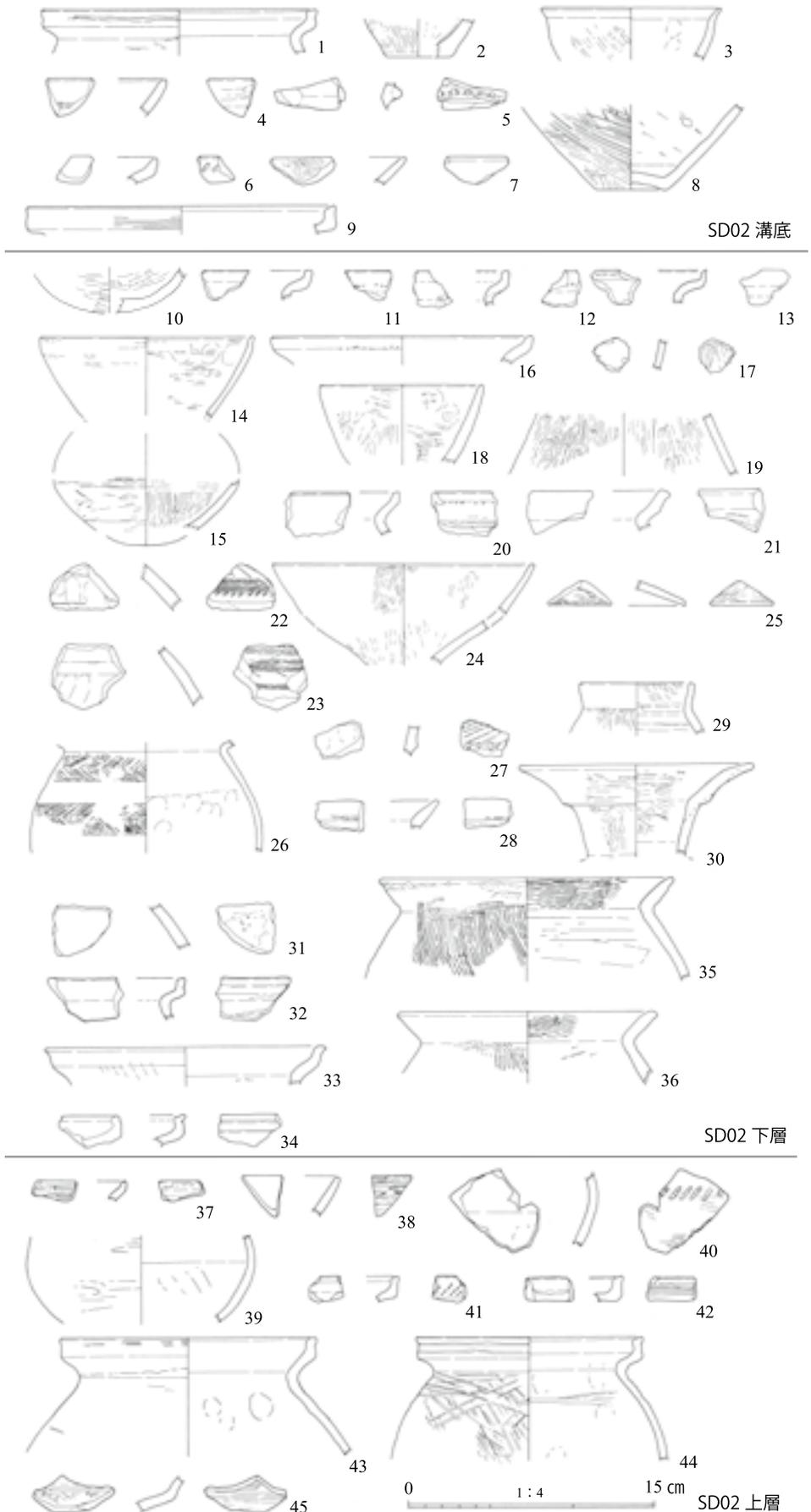


図 11 稲部遺跡 19 次 SD02 出土土器

2016)。

また、会津大塚山タイプの鞆は、平組織で市松文様をあらわす。これについて雪野山古墳例（棺外鞆）会津若松市会津大塚山古墳例（南棺鞆）は織りの手法による製作と考えられたが（菊地 1994、杉井 1996）、その後に出土した御所市鴨都波 1 号墳例では編みの手法により復元製作が行われた。分析によると、藤か竹のような有機物を細かく裂いたものを矢筒本体の縦方向に並べて縦材とし、横方向に絹糸を編み上げたものという（岡田 2001、押元 2003）。同じく、城の山古墳例（中央鞆）は、縦材が幅 4 mm、厚さ 1 mm で、竹笹類の稈（かん）の表皮近くを裂いたもの（小林・鈴木 2016）、横材が太さ 0.4 mm 前後で Z 字に撚りのかかった糸である（本吉 2016、四柳 2016）。

このように、「巻き」仕上げの鞆と「編み」仕立ての鞆は、撚りのかかった絹糸を用いるという、志向性がある。また、絹糸を巻き上げ、あるいは編み上げながら黒漆を塗り、矢筒が形成される。鞆作りの工人は、巻き、あるいは編みの技術を有していたはずである。

一方、鼓山タイプの鞆は、綾組織で綾杉文様をあらわす。これについては鼓山古墳例により織りの手法による

と考えられてきた（角山 1968、沼 1968）<sup>10)</sup>。そうとすれば、布自体はあらかじめ織られるので、鞆作りの工人は織りの技術は有していなくてもよい。鼓山タイプの綾組織が織りの手法によるという見解について大きな異論はないが<sup>11)</sup>、鞆製作における技術的な位置づけはあいまいである。また、前二者のような復元製作は行われておらず、経緯の素材が不明であることも議論が進んでいない要因であろう。

稲部遺跡例は、鼓山タイプと考えられ、経に S 字方向の撚りのかかった絹糸、緯に植物性繊維が用いられたことが科学分析により判明した（戸塚 2022）。これを矢筒本体に即してみると、本体の縦方向が緯の植物繊維、横方向が経の絹糸となる。きわめて重要な結果である。

なぜなら鼓山タイプは、会津大塚山タイプと組織は異なるが、縦横方向の素材が共通し、その製作技法が類似する点に着目できるからである。すなわち、矢筒本体の



図 12 纏向遺跡出土筒状繊維製品と稲部遺跡出土鞆の断面形

表 1 纏向遺跡・稲部遺跡出土鞆属性表

遺跡名		奈良・纏向遺跡辻地区土坑 10	滋賀・稲部遺跡 19 次 SD02
鞆型式		鼓山タイプ	鼓山タイプ
残存部位		矢筒本体部上位	1 号横帯：矢筒本体部上端 2 号横帯：矢筒本体部
矢筒本体部	材質	繊維 経：撚りのかかった細糸（絹糸の可能性） 太さ 0.7～0.8 mm 緯：細糸（絹糸の可能性）	繊維 経：撚りのかかった絹糸 太さ 0.5～0.6 mm 緯：植物繊維 幅 1.0 mm 厚さ 0.03～0.04 mm
	文様	綾杉文様	1 号横帯：綾杉文様 2 号横帯：綾杉文様・突帯間は市松文様
	長さ	20.2 cm 以上（推定復元 50～60 cm 以上）	推定復元 60 cm 以上
	幅	7.9～8.2 cm 以上	推定 19.5～25.0 cm 前後 1 号横帯：19.5 cm 2 号横帯：15.1 cm 以上
	厚さ	2.1～2.5 cm（推定）	2.4～3.0 cm
	断面形	隅丸長方形	長楕円形
	漆塗布	不明（灰色）	外面から黒色漆を塗布（黒色）
横帯	形状	—	带状品 1 号横帯：突帯 2 条 2 号横帯：突帯 3 条
	条数	—	1～2 条以上
	位置	—	矢筒本体部上端と下位
紐通し	位置	—	2 号横帯に伴う 1 つが残存
	形状	—	織物をループ状にした輪
	材質	—	繊維
	漆塗布	—	黒色漆を塗布（黒色）
底箱部		—	—
蓋本体	材質	—	—
	文様	—	—
蓋箱部	材質	—	—
	文様	—	—
備考		1971 年 祭祀土坑出土	2019 年 導水施設関連の溝出土 1 号横帯と 2 号横帯は板と共伴し、同一個体の鞆 1 号横帯は蓋に関連する可能性もある

縦方向は、織りの緯＝編みの縦材で植物繊維、本体の横方向は、織りの経＝編みの横材で絹糸、と一致する<sup>12)</sup>。実際、綾杉文様も市松文様と同様に、編みの手法によってもあらわすことができる。平組織と綾組織とでは編み上げる手順は異なるが、矢筒本体の縦方向に並べた縦材に、底から絹糸を横方向にラセン状に編み上げるという基本は同じである。また、逆に、織りの手法によっても、経に柔軟な絹糸を用いることで、綾組織の綾杉文様、平組織の市松文様のどちらも織り出すことができる。

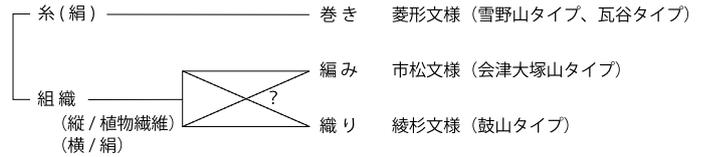


図13 素材と技法にみる鞞各種

(2) 筒状繊維製品の組織の特徴

以上の整理(図13)を踏まえつつ、本例の組織の特徴をみていく。ここでは、ひとまず織りの手法による組織として考察を進めるが、編みの手法による可能性を否定はしない。編みの具体的な手法については別途、考察したい<sup>13)</sup>。織物は、機の縦方向に経をかけ、上下に分けたところへ、緯を横方向に通してつくる。本例についてみると短軸方向が経、長軸方向が緯となる。鞞である場合、矢筒本体の縦方向が緯、横方向が経となる。この上端部では2枚の布が重なり、それぞれ組織が異なってみえる。そこで、上端から下端まで長さ20.2cmにわたって残る下層部(A)と、その直上で上端から長さ3.6cmほど重なる上層部(B)の組織の特徴をみていく。

まず、本例の大部分を占めるAは、綾組織である。「綾織」(織りによる綾組織)は、斜め方向に連続交差する最小単位を1つの完全組織として、繰り返すものである。Aでは経1本が緯2本上を越し、次に緯1本下に沈む。このような組織を特に「経三枚綾」という(鈴木2005)。図14に示した組織図は、経と緯の密度を1対1としたものである。しかし、実際には、経同士が密に入り、緯はほとんどみえない。図15は、経と緯の密度比を本例に合わせて試作したものである。実測図(図5)では、経のみが示されていることに注意したい。

Aの織密度は、経が19～30本/cm、緯はそれ自体が経に覆われているため、ほとんど確認できないが、4本/cmほどと推測される。経はS字方向に撚りがかかり、太さは約0.7～0.8mmを計る(図16-1・2)。

次に、上端の上層部(B)の組織をみると、同じく経が密に混み、緯はほとんど見えない。また、経の織目が平行に揃い、あたかも平組織のようにみえる。しか

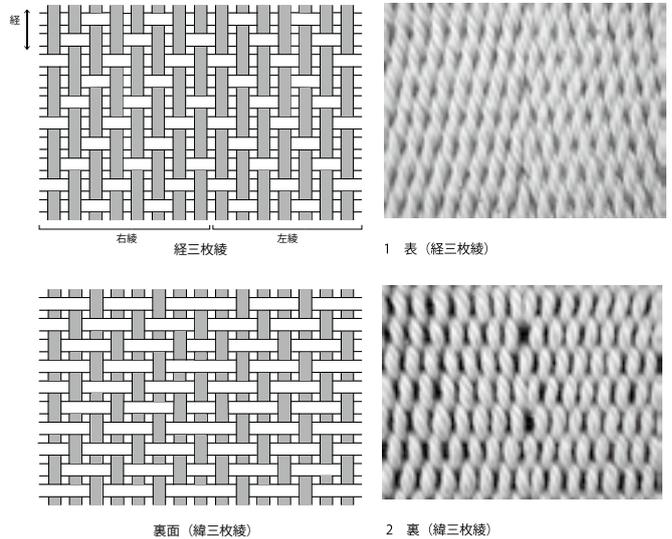


図14 組織図

図15 試織

し、仮に「平織」であれば、織り技法の異なる(つまり、別々に製作された)織物が経方向を揃えて重なり合うことになり、その必然性に欠ける。むしろ経の密度や太さがAと近似することから、その裏面ではないかと考えられる。

経三枚綾であるAの裏面では、緯1本が経2本上を越し、次に経1本下に沈む。すなわち「緯三枚綾」となる。緯三枚綾は、経が密に混んでいると、平組織とよく似た外観となる(図16-2裏)。Bの織密度は、緯三枚綾とみた場合、経は30～31本/cm、緯は約4本/cmである。経はAのそれとほぼ同様に、S字方向に撚りがかかり、太さは0.7～0.8mmを計る(図16-3・4)。Aの織密度は部位によりばらつきがあるが、使用にともなう歪みが生じたものと思われる。この点を考慮に入れると、AとBとでは組織や糸の特徴が整合し、両者が表裏一体のものである可能性が高い。BがAの裏面をみたものとすれば、1枚の綾織物を上端部で折り返して、筒状にしたと理解することもできる。また、Bの下端部の経をみると、一部の欠損を除いて良好に残り、織耳の可能性もある<sup>14)</sup>。ただし、上端部が欠損しているため、Aとのつながりは不明であり、折り返したものであるかど

うか確定はできない。

なお、矢筒本体の上端部を外側に折り返して口縁を形成したものとして、会津大塚山古墳例（南棺鞆）が指摘され（菊池 1994）、鼓山タイプの鞆では、鼓山1号墳例（1号鞆、2号鞆）や大塚森古墳例が挙げられている（水澤 2016）。また、矢筒口縁部における繊維製品の重なりが蓋である可能性も指摘されている（杉井 2013）。いずれにせよ、本例にみる上端部の重なりは、鞆と確定するための指標の一つになるだろう。

本例は、同じく経三枚綾（緯三枚綾）である稲部遺跡例とよく似た特徴をもつ。稲部遺跡例では、経 21～24 本/cm、緯 4～5 本/cm、経はS字方向に撚りをかけた絹糸で、太さは約 0.5～0.6 mmを計る。また、緯については、稲部遺跡例では幅約 1 mmの扁平な形状で、無撚りの植物繊維である。本例の糸の材質について科学分析は行われていないが、経は稲部遺跡例と形態的特徴が類似することから、絹の可能性がある。一方、緯はBの下端の欠損部分において一部確認できる（図 16-5）。植物繊維よりも、むしろ経を構成する繊維（絹か）とよく似

た特徴がみられる。もし、緯も絹であれば、どちらも柔軟な素材であるため、織りの手法によらざるを得ない。

### （3）綾杉文様と織りの手法

次に、綾織によって綾杉文様を構成する手法についてみたい。綾織では織目が斜方向に流れる。左下から右上の流れを右流れ（右綾）、その逆を左流れ（左綾）という（図 14）。本例にみられる綾杉文様は、右綾と左綾のまよりの組み合わせによって織り出される。そもそも、綾織は平織に比べて経と緯とが交差する点が少なく、経（裏面では緯）が表によくあらわれる特徴を持つ。さらに、経の密度がきわめて高いことから、文様の表出効果は絶大である。経に絹が用いられると、その光沢がよく映えただろう。

機の縦方向にかけた経を上下に一斉に分けるのが、綜紵や中筒などの開口具である。まず、基本の三枚綾を織るには、3枚の綜紵が必要である<sup>15)</sup>。さらに、綾杉文様をあらわすには、右綾と左綾の単位を組み合わせる。右綾と左綾の文様の大きさ（幅）は、それぞれ連続する

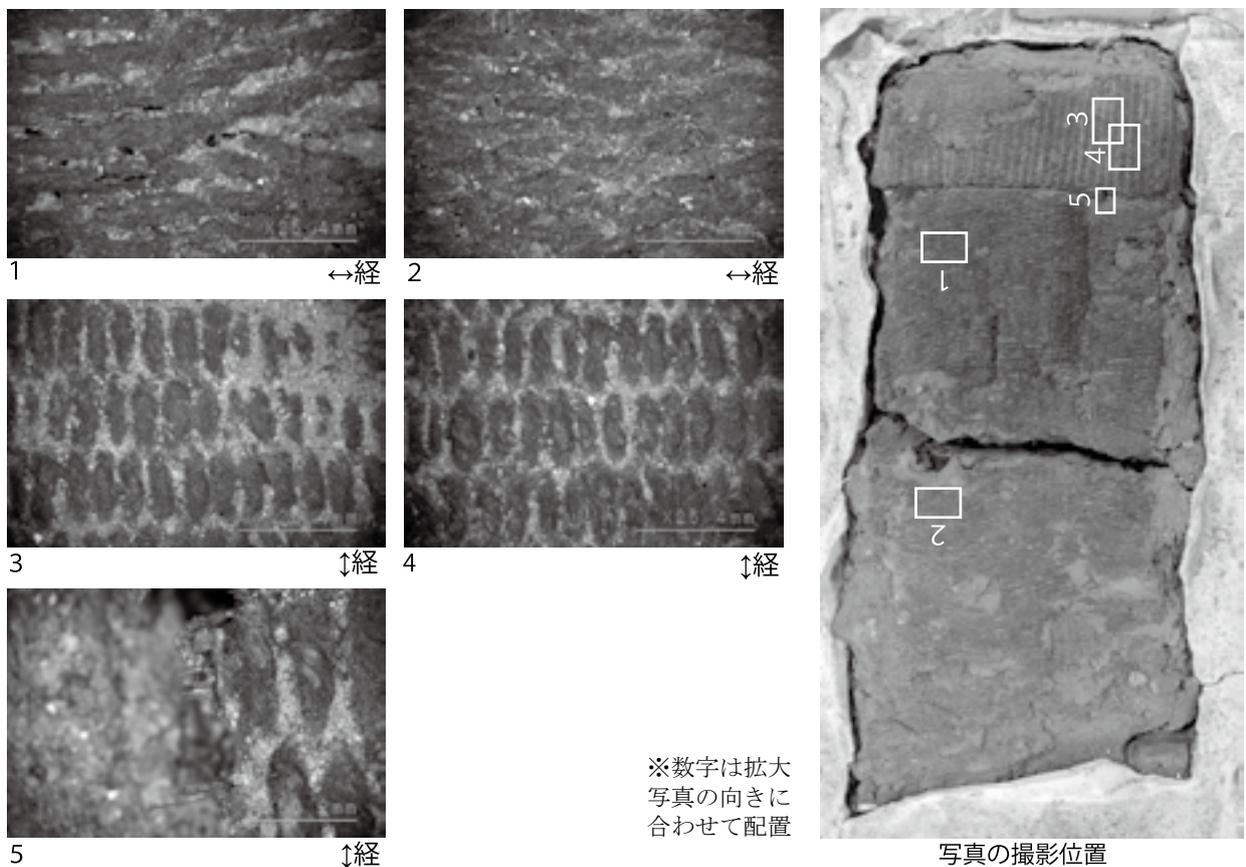


図 16 筒状繊維製品の組織

単位数により変えることができる。単位数は綜紵の仕掛けによってあらかじめ設定され、その組み合わせによる文様が縦方向に繰り返す、織り出される。

右綾と左綾による文様構成がよくわかる稲部遺跡例では、突帯を境に連続する文様の大小をはっきりと変化させている。一方で、一つの綾杉文様を構成する右綾と左綾の大きさが、厳密には対称形とならない部分が見られる。つまり、右綾と左綾の単位数が同じではなく、若干の増減がある。この傾向は、本例にもみられるようである。現代の常識では、綾杉文様を織り出すのに、完全な左右対称形となるように、単位数を等しく設定する。その誤差は一見してわからない程度であり、織手の視覚的な感覚によって単位数が設定されているのだろう。古代ならではの大きさともいえるのかもしれない。

あるいは、前述したように、織りではなく、編みの手法により製作された可能性も残る。編みの場合、1段ごとに編み進めるので、その都度、編手が右綾と左綾の単位数を加減できるからである。このように、本例が「織り」仕立ての鞆、あるいは、「編み」仕立ての鞆を形成するものであるのかどうか、今後、経と緯の素材を明らかにした上で、さらに検討する必要がある。

#### (4) 小結

このように、本例の組織は、糸の撚りやその構造において鼓山タイプの鞆とよく似た特徴を有している。糸の材質は確定していないが、稲部遺跡例を踏まえると、従来、織りの手法によると考えられてきた鼓山タイプの鞆の製作の技術についても再考の余地がある。

綾組織の織りの技術的系譜についてみると、中国の漢代では「綺」という綾織がある。綺は、経 100 本 / cm 前後の高密度の平織の地に、四枚綾の織りで文様を表したものである。原組織の綾織よりも複雑で、数十枚の綜紵を仕掛けた高機で織られたと考えられる(鈴木 2005、黄・陳 2015)。これに対して、本例や鼓山タイプにみる繊維製品は、原組織が三枚綾で、綜紵 3 枚を仕掛けた原初的な腰機でも織ることができる。また、撚りのかかった太い糸が用いられ、密度も粗いことから、その技術的系譜は異なるだろう。今後、広く編物も含めた他の事例もみていく必要がある。最後に、編みと織りを区別する指針の一つとして、糸の撚り方向について述べておきたい。

雪野山タイプでは、Z 字方向の撚り糸、これに対して鼓山タイプでは S 字方向の撚り糸が用いられている。会津大塚山タイプでは、双方がみられるようである<sup>16)</sup>。冒頭で述べたように、絹素材の織物には、無撚りの糸が用いられるが、弥生時代から古代・中世まで麻素材の織物では、ほぼ例外なく S 字方向に撚りがかけられている。撚手の身体の右側で紡錘を回転する方法による結果であり、その原則は通時的に認められる(東村 2013・2018)。S 字撚りの絹糸の使用は、麻素材の糸の撚り、引いてはその技術を保有する織手の関与を想定してもよいのではないか。糸の素材が変わっても、従来の方法で撚りかける事例として、3 世紀以降のエジプトで織られたコプト織物が参考になる<sup>17)</sup>。ただし、現時点で鞆に用いられた糸の素材や撚り方向について明らかなものが少なく、今後、注視していきたい。

## VII. 纏向遺跡出土筒状繊維製品の位置

### (1) 纏向遺跡出土筒状繊維製品・稲部遺跡出土鞆の型式学的位置

以上の型式学的検討によると、纏向遺跡辻地区土坑 10 出土筒状繊維製品は、稲部遺跡 19 次 SD02 出土鞆と同様に鞆である可能性が高い繊維製品と評価できよう。次に、纏向遺跡出土筒状繊維製品を鞆とみなし、鞆の古相資料となる稲部遺跡出土鞆とともに、両者の帰属する型式と年代について、既知の古墳時代前期の古墳に副葬された鞆とあわせて検討してみたい。

古墳時代前期の鞆の矢筒部の杉井健と水澤幸一による型式学的研究(杉井 1996・2013a・2013b、水澤 2016)を参照し、両遺跡出土の鞆の型式学的位置について考えてみたい。杉井健は、革製と繊維製に大別し、外面の文様から革製を雪野山タイプ(菱形文様 A)、瓦谷タイプ(菱形文様 B)、山王寺大柁塚タイプ(直弧文)に分け、繊維製を鼓山タイプ(綾杉文様)、国分尼塚タイプ(山形文様)、会津大塚山タイプ(市松文様)に分けた。また、菱形文様の鞆は、1 単位 10 本前後の細糸で埋める雪野山タイプの菱形文様 A、1 単位 18 本前後の細糸で埋める瓦谷タイプの菱形文様 B に細分した(杉井 1996・2013a・2013b)。

これに対し、水澤幸一は、編物製として①菱形紋巻き編み鞆、②綾杉紋編み上げ鞆、③山形紋編み上げ鞆、④

市松紋編み上げ鞆に分類し、①菱形紋巻き編み鞆を菱形紋太糸タイプと菱形紋細糸タイプに細分した。栃木市山王寺大枡塚古墳例等は木製鞆とした(水澤 2016)<sup>18)</sup>。

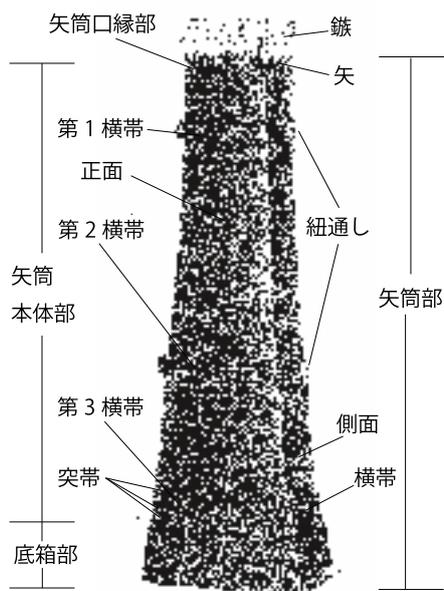
まず纏向遺跡・稲部遺跡出土鞆は、その綾杉文様の織組織の特徴等から、菱形文様をもつ杉井分類の東近江市雪野山古墳棺内鞆を標識資料とする雪野山タイプ・水澤分類の菱形紋巻き編み鞆、杉井分類の木津川市瓦谷古墳東棺鞆を標識資料とする瓦谷タイプとは異なることを指摘できる。両遺跡例は、むしろ、杉井分類の鼓山タイプ(図 17・図 18)・水澤分類の綾杉紋編み上げ鞆と分類された鞆の一群と密接に関わる鞆の可能性が高い。既知の古墳時代前期の古墳に副葬された鼓山タイプの鞆としては、向日市元稲荷古墳、宮津市波路古墳、岡山市備前車塚古墳、鼓山古墳 1号・2号鞆、行橋市ビワノクマ古墳、会津大塚山古墳北棺、加美郡加美町大森塚古墳の諸例が知られる。これらに加え、尼崎市水堂古墳副葬の有稜系鉄鏃が束状に納められた帯状繊維製品も綾杉文様の織目をもつ鼓山タイプの鞆に含めることができる<sup>19)</sup>。今後の検討により類例が増える可能性はあるが、管見では、古墳時代初頭から前期の鞆は 26 例以上が認められ、分布図(図 19)と一覧表(表 2)を示す。

纏向遺跡・稲部遺跡出土鞆は、これらの古墳副葬鞆と比較すると、鞆自体の全体形、横帯の有無、横帯の形

態と幅等で細部の違いが認められる。例えば、纏向遺跡例の幅は 7.9～8.2 cm であり、比較的細身の矢筒口縁部で幅 14.0 cm の波路古墳例(鼓山タイプ)よりも幅が狭く、横帯も認められない。また、纏向遺跡例は、雪野山古墳棺内例(雪野山タイプ)も矢筒口縁部付近で復元幅 10.5 cm と幅が狭いが、これよりも細身である。このように、大きさ等の細部の違いはあるとしても、纏向遺跡例は、古墳副葬の鼓山タイプの鞆と綾織による綾杉文様の織組織をもつという点ではきわめて共通する属性を持ち合わせており、同様な製作技術の系譜をもつ鞆として位置づけられよう。このことから、纏向遺跡・稲部遺跡出土鞆は、鼓山タイプの古相資料であると考えられ、鼓山タイプが、雪野山タイプよりも古くから出現していたことが考えられる。両資料が古墳副葬鞆よりも時期が古く、かつ副葬品ではない集落遺跡出土例であることは、列島における鞆の発祥をめぐって注目すべきであろう。

## (2) 纏向遺跡・稲部遺跡出土鞆の年代

**纏向遺跡出土鞆の年代** 纏向遺跡出土鞆の年代については、庄内期新段階の報告書掲載の甕(10)を参考としてすでに言及したが(戸塚 2022、戸塚ほか 2024)、このほかの土器の所見によると、土坑 10 出土土器は、庄内式期新段階末の土器群と位置付けられ、大きく前後にずれ



福井市鼓山古墳 1号鞆 鼓山タイプ(1:10) 高さ 69.0 cm

図 17 鞆の部分名称

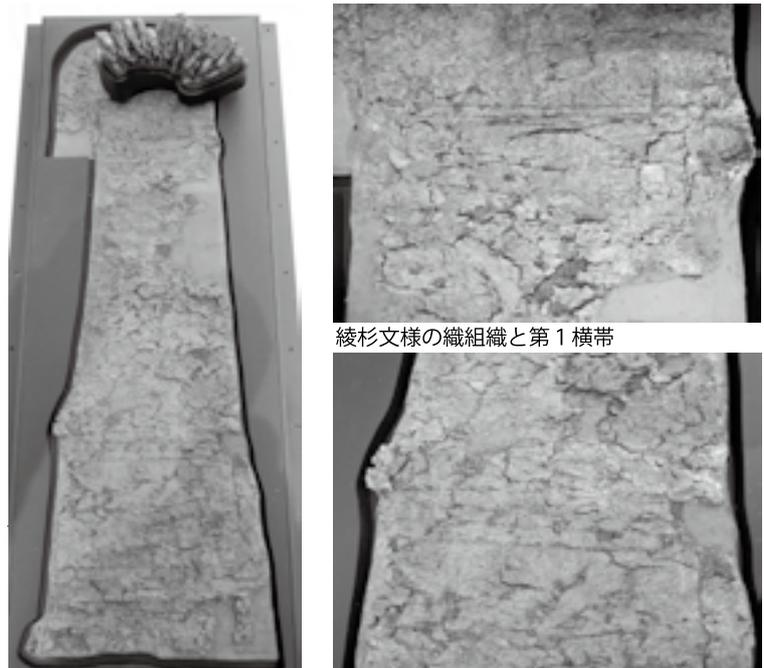


図 18 鼓山古墳 1号鞆(福井県福井市)



図 19 古墳時代初頭から前期の靴の分布

表 2 日本列島の古墳時代初頭から前期の靴一覧

番号	靴型式	遺跡名・古墳名	県名	靴名称	矢筒部		備考	
					本体			
					材質	文様		
1	鼓山タイプ	纏向 辻地区土坑 10	奈良		繊維	綾杉文様	集落遺跡 祭祀土坑	
2		稲部 19次 SD02 溝	滋賀		繊維	綾杉文様	集落遺跡 導水施設	
3		元稲荷	京都		繊維	綾杉文様		
4		備前車塚	岡山		繊維	綾杉文様		
5		波路	京都		繊維	綾杉文様		
6		水堂	兵庫		繊維	綾杉文様		
7		ピワノクマ	福岡		繊維	綾杉文様		
8		鼓山 1号	福井	1号靴	繊維	綾杉文様		
9		鼓山 1号	福井	2号靴	繊維	綾杉文様		
10		会津大塚山	福島	北棺靴	繊維	綾杉文様		
11		大森塚	宮城	西榔靴	繊維	綾杉文様		
12		雪野山タイプ	雪野山	滋賀	棺内靴	革	菱形文様	
13			石塚山	福岡			菱形文様	
14			大迫山 1号	広島		革	菱形文様	
15		瓦谷タイプ	森尾	兵庫			菱形文様	
16			瓦谷 1号	京都		革	菱形文様	
17	雪野山・瓦谷折衷タイプ	城の山	新潟	南靴	革	菱形文様		
18	国分尼塚タイプ	国分尼塚 1号	石川		繊維	山形文様		
19	会津大塚山タイプ	雪野山	滋賀	棺外靴	繊維	市松文様		
20		鴨都波 1号	奈良		繊維	市松文様		
21		会津大塚山	福島	南棺靴	繊維	市松文様		
22		阿志岐 B-26	福岡		繊維	市松文様		
23		城の山	新潟	北靴	繊維	市松文様		
24		城の山	新潟	中央靴	繊維	市松文様		
25	山王寺大柁塚タイプ	山王寺大柁塚	栃木		革?	直弧文		
26		石山	三重	東榔靴	革?	直弧文		

る時期の土器を含まないことから、この時期のなかで掘削され、間もなく土器と靱を含みこんで埋没したという堆積状況が推定される。このことから、共伴した土器群の年代をふまえると、纏向遺跡出土靱の年代は、庄内式期最末と位置付けられる。

なお、靱が出土した土坑 10 では他地域の土器が比較的多く含まれ、壺では西部瀬戸内・山陰・東海（伊勢を含む）が、甕では北陸（越前）・近江（湖南・湖東）・東海の土器が認められる点も重要である。辻地区土坑 10 から流路を挟んで南に位置する同地区土坑 4 は纏向 3 式期とされ、山陰系・北陸系・東海系等の外来系土器が多く伴って出土した。そして、土器だけでなく、黒漆塗丸木弓、紡織具、木製高坏、盤、舟形木製品、儀仗等の豊富な木製品が出土したことから、周辺での一連の祭祀に関わる代表的な土坑であると考察された（石野 1976b）。土坑 10 では、多くの外来系土器が出土した点で土坑 4 に近い土器組成を示し、土坑 4 のような各種木製品は出土していないが、かわりに希少な矢入れ具である靱の残欠 1 点が出土したことを評価すれば、土坑 10 についても土坑 4 に近い祭祀的な性格を考慮しておく必要があり、周辺での祭祀において靱が用いられたことも推測される。靱が土坑において完形の状態ではなく、矢筒部下方が斜めに欠損し、矢入れ口側の残欠として出土した点にも留意しておきたい。

**稲部遺跡出土靱の年代** 稲部遺跡出土靱の出土状態は、溝の機能と導水施設との関連については詳述を控えるが、以下のとおりである（戸塚 2022）。同一個体の靱の一部とみられる複数の横帯と周辺部分である 1 号横帯と 2 号横帯が、まとまって長大な板とともに導水施設に関わるとみられる溝 SD02 で出土した。氾濫流路のすぐ南に位置する SD02 は、庄内式期の東西方向の大溝 SD01・SD04 を切って開削された南北方向の直線的な溝である。最大幅 1.6m 以上、深さ 50 cm を測り、断面形はおよそ逆台形を呈する。1 号横帯は板の上面と近いレベルで西隣に接し、2 号横帯は板の上面に接して貼りつくような状態で確認された。板は、長軸方向と溝の方向が一致した向きで検出され、幅が広い方の小口が北に、幅が狭い方の小口が南に位置して溝中におさまり、沈められたような状態であった。なお、板と靱が検出された位置では溝の周囲で 1 間×1 間、東西 1.8～2.1m、南北 1.3m の規

模で柱穴の並びが認められ、溝に伴う覆屋などの何らかの施設があった可能性を指摘できる。また、氾濫流路に近い位置の溝底では円礫が貼りついて集積され、整然としたものではないが、貼石状を呈する。

層位としては、板と靱は、炭の粒子や微細な塊を含む土壌の自然堆積である上層とシルト混じり粘土、あるいは細粒砂～シルトの下層の層理面で検出された。下層上面が機能面とみられ、機能時は水が流れていたが、板と靱がほぼ同時期に溝中に存在していた時期以降に廃絶し、周辺から流れ込んだ土壌によって埋没したと推定される。板はヒノキ科で、一方の小口の幅が広く、残存長 151.0 cm であるが、現地で確認された幅が狭い小口の先端部片を含めると、176.0 cm に復元できる。出土人骨から知られる当時の男性の平均身長約 161.0 cm（中橋・永井 1989）よりも少し長く、一方の小口が広いことが特徴であり、何らかの構造物を構成する板である可能性が考えられる。SD02 は、周辺の掘立柱建物、杭跡と関連する導水施設の溝であると考えられる。

SD02 の溝底と下層では、庄内式期の土器が主に出土し、板と靱から離れた位置では大和の布留式期初頭の小型丸底土器も出土した。ただし、溝の堆積状況は一様ではなく、土器が上層から下層へ混じる余地はある。上層では庄内式期末から布留式期初頭に併行する受口状口縁甕等が出土した（図 12）。よって、SD02 の開削は庄内式期でも新段階に遡る可能性が高く、庄内式期新段階から布留式期初頭にかけて機能して布留式期初頭頃に埋まったと考えられる。上層と下層の層理面で検出された板と靱は、庄内式期新段階末に位置する可能性があり、土器の下限としては布留式期初頭併行期、布留 I 式古相である。実年代は、3 世紀第 2 四半期末であると考えられる（戸塚 2022、戸塚ほか 2024）。纏向遺跡・稲部遺跡出土靱の年代は、古墳時代初頭、3 世紀第 2 四半期末とみられ、古墳が出現する直前の時期とみられる。

### （3）纏向遺跡出土靱の位置と靱の系譜に関する問題

**古墳副葬靱の年代** 纏向遺跡・稲部遺跡出土靱の年代について検討したが、これに続く古墳時代前期の古墳副葬靱の様相と年代についてみていきたい。橋本達也は、古墳副葬靱の最古段階の資料として鼓山タイプ・綾杉紋編み上げ靱の備前車塚古墳と元稻荷古墳、雪野山タイプ・

菱形紋巻き編み鞆の苅田町石塚山古墳の諸例を位置づけており、最古段階に鼓山タイプと雪野山タイプの 2 タイプの存在を認めた（橋本 2014）。そして、これに鼓山タイプの水堂古墳例、雪野山タイプの標識資料である雪野山古墳棺内鞆も加えることができると考えている。瓦谷タイプに分類される豊岡市森尾古墳例もこれらに近い時期と推定される。また、鞆が古墳時代前期の大和・柳本古墳群を形成した被葬者集団によって構成される初期の近畿中央政権の成立とともに生み出された権力を表徴し、その保有が政権との紐帯を表すものであった可能性を指摘した（橋本 2014）。さらに、これをふまえ、鞆を東は北陸ルート、西は瀬戸内ルートに連なる首長層の間で重要な意味をもった器物と位置付けた。

**鞆の系譜と纏向遺跡出土例の位置** 纏向遺跡・稲部遺跡出土鞆は、以上述べてきた古墳時代前期前葉、3 世紀後葉から末頃以降の政権中枢の鞆の利用を遡り、これまでに古墳副葬鞆として認識されてきた鼓山タイプと型式学的に接点をもつ 3 世紀第 2 四半期の資料であると考えられる。また、両者では明確な時期差を認めるのは難しいが、両者の年代は古墳時代初頭、3 世紀第 2 四半期末と位置付けられ、列島における最古段階の鞆として評価できよう。纏向遺跡出土鞆は、稲部遺跡出土鞆とともに、古墳時代初頭に位置する鞆の最古段階の資料として位置づけられる。列島における鞆の最古段階資料は二例と少ないが、いずれも鼓山タイプである。本稿の検討により鞆としての性格を見出すことができた纏向遺跡出土鞆と稲部遺跡出土鞆の発見を契機として、庄内期新相から布留期初頭の社会の中で鞆の出現について考えていくべきであり、出現当初から完成度の高い鞆の存在を予知できる。そして、鞆の初現期において、両者が含まれる綾織りによる綾杉文様の織目をもつ鼓山タイプの鞆が、鞆の発祥と系譜に大きく関与したものとみて大過ないだろう。両者は鼓山タイプの古相として位置づけられる可能性が高く、今後、古墳副葬鞆との比較が課題となる。

両者は、列島の鞆としては年代がかなり古いことに加え、古墳副葬品ではなく、集落遺跡で出土したという点でも、列島における鞆の系譜と出現を考えるうえで欠かせない重要な資料となろう。これまでの検討により、3 世紀後葉から末以降、初期ヤマト政権との関係性のなかで古墳に副葬される器物として重要な位置を占めるよ

うになる鞆の初現期の資料が、大和東南部の纏向遺跡、近江湖東の稲部遺跡で出土したということになる。これは、3 世紀中頃の外来的な綾織りの技術あるいは製品の近畿への流入において、大和東南部と近江湖東の近畿の南と北の集落遺跡が関わっていたものと考えられ、拠点集落遺跡の性格、これらを取り巻く地域間関係等の議論にも波及する可能性がある。3 世紀第 2 四半期末、およそ 3 世紀中頃の時代を鞆の出現期として、また古墳時代開始期の重要な画期として評価できるのではないだろうか。

さて、鞆の系譜を考えるうえで、管見の及ぶ朝鮮半島の矢入れ具についてもふれておく必要がある。楽浪漢墓では、前漢時代末頃、紀元前 1 世紀後半に位置し（高久 1993）、王根墓と特定された平壤市楽浪区域石巖里第 219 号墳（榎本・中村 1975）で木製の矢筒 2 点が副葬され、この内 1 点は、外面を銀製飾金具で装飾した円筒形の漆塗木製矢筒である。原三国時代、紀元 1 世紀代の慶尚南道昌原市茶戸里 32 号墳（杉井 1996）でも鉄鏃を納めた漆塗木製矢筒が副葬されていた。後の三国時代では、列島の鞆と同じ系譜とみられる雪野山タイプの鞆が、慶尚南道金海市大成洞 14 号・15 号墳（申 1991）でそれぞれ副葬されている。確認できる例は少ないが、原三国時代において、革製や繊維製の矢筒よりもむしろ、円筒形の木製矢筒が主要な矢入れ具であったとすれば、初現期の鞆である纏向遺跡・稲部遺跡出土鞆の系譜について、朝鮮半島との関係性だけでは容易に理解できないことを暗示する。

**鞆の製作地に関する問題** 初現期の鞆の製作地に関しては、①大陸あるいは半島で織成された製品が渡来した、②織物が大陸から舶載されて列島で鞆として加工された、③列島で織成・加工された等の可能性の想定にとどまるものである。①、③の可能性は残るが、矢筒部口縁部から底箱部との接合部まで連続して織成する必要があるという鞆の構造と製作技術を考慮すると、②の考え方はやや難しい。ただし、纏向遺跡・稲部遺跡例が、後の古墳時代前期の首長の威儀具として有力首長墳に副葬される鞆の系譜と深く関わるとみれば、稲部遺跡（植田ほか 2021）、雪野山古墳棺内（中川 1996）、瓦谷古墳（筒井 1992）の諸例で素材として認められた絹糸の舶載や養蚕の伝来の可能性は否定できないだろう。近畿で絹織

物が散見されるようになるのは庄内式期以降であり、鞆の製作地に関する議論は、絹糸の舶載だけでなく、絹糸の生産、すなわち近畿での養蚕の起源とも深く関わる問題としてとらえる必要がある（戸塚 2022）。

纏向遺跡出土鞆は、稲部遺跡出土鞆と同様に、2世紀までの列島には見られなかった細糸を素材とした綾織物によって製作された完成度の高い繊維製品である。稲部遺跡出土鞆の経には外来的な素材である絹糸が使用され、纏向遺跡出土鞆についてもそれが使用された可能性がある。初現期の鞆については大陸的な要素を一定程度認めざるを得ず、倭国における絹糸の生産と紡織技術、木工、漆工及び漢代から魏普代の紡織技術、矢入れ具の実態について注意を払いつつ、鞆の発祥について広い視野で考えていく必要性を指摘しておきたい。

## VIII. 日本列島における鞆出現の社会背景と大和地域・近江地域

本稿で日本列島における出現の具体相を瞥見した鞆なる器物は、前期古墳のグレードの高い副葬武具の一つであり、その品目構成の上でも、それを副える古墳はなお限定的な存在である。鞆副葬古墳は現在 40 基前後を数え、その型式別の分布状態や古墳の築造時期幅などは詳細な研究史の整理と現状理解、先学の諸研究を踏まえての新たな分析視角を提示し、古墳出現期研究や纏向遺跡の調査・研究において等閑にできない問題をいくつも包含することを指摘した。

### (1) 辻地区土坑 10 出土資料と彦根市稲部遺跡溝 SD02 出土資料の対比をめぐる既往資料検討の意義

既述したように、日本列島において現状で 2 例しかないものの、二つの資料が示唆する現状を今一度整理し、その意義や価値を古墳出現期の社会関係の中で若干考察することとする。

先ず強調できることは、鞆の一部と思しき繊維製品が纏向遺跡例も稲部遺跡例も古墳そのものからの出土ではなく、集落遺跡から確認されたことの初出例となった点である。また、集落の性格はどちらも古墳出現期に拠点性を示す大型集落であり、近畿の南部と北部に離れた場所に存在することにも大いに関心が及んだ。出土遺構は稲部遺跡が溝、纏向遺跡が土坑であり、どちらも集落の一般居住域の近在地と言える遺構から見つかったわけで

はない。稲部遺跡の場合、遺跡内の北東部に位置し、堅穴建物や掘立柱建物が密集するエリアよりは東方に位置し、遺構面も高く生活臭に乏しい祭祀域にあり、玉砂利を伴う導水遺構から出土した。他方、纏向遺跡も従来から祭祀区域と目される辻地区に存在し、マツリに用いられた土器や各種祭儀具を収納した土坑群からの検出資料である。さらに両者は一定の日常土器を伴っており、その時期は幅を見込んでも庄内式期最末期～布留式期最初頭のいわゆる古墳出現期の土器と同伴していた。纏向遺跡土坑 10 は 1 点の報告土器（石野・関川 1976）からの想定（纏向 3 式期）を裏切らない多くの土器が今般新たに確認され、未報告主要品の実測を行った結果、筒状綾織製品の帰属時期をより詳しく補強するものとなった。土器の様相は収容する土坑の大きさに限りがあるものの多方面の外来系土器、とりわけ搬入土器が多くみられ、著名な辻土坑 4 下層資料の実情に匹敵する。西は西部瀬戸内から東は伊勢湾岸、東海西部まで、北は北陸越前までの関わりが認められ、特に近江産の受口状口縁甕の搬入が確認できたことは予想を超える収穫とすべきであろう。近江の甕は湖南（図 4-13）・湖東（図 4-14）のものともみられ、後者は湖南の同型式甕と比べ、器壁にかなり厚みが認められ、旧国域内にあっても搬入元の地域差が明瞭に読み取れた。在地の畿内系の甕はバリエーションがみられるものの、型式差を有するその多くが庄内式期末頃の甕であり、弥生後期形甕の系統のものを僅かに含むものの布留式以降に同定できる土器は存在しなかった。S 字甕の C 類志向と僅かながら布留傾向要素の小型土器の存在を下限とし、多くが意図的な遺棄の同時性を確認する出土状態を保っていたと考えてよいだろう。

### (2) 古墳副葬武具としての鞆の出現をめぐる問題軸

伴出した土器は稲部遺跡 19 次 SD02 上層出土資料と纏向遺跡辻地区土坑 10 出土資料の下限土器の時期はおおむね等しく、およそ 3 世紀第 2 四半期末の範疇で理解できるものであり、古墳の始まりと想定される箸墓古墳出現の直前期に比定し得る。厳密にはその小期においても後半段階に特定できるものと思われる。

したがって、日本列島における鞆という武具の発現過程と深く係わる資料が全国で僅か 2 例ながら、古墳出現期に俄かに交流が活発化する集落側の事例として確認で

きた意義は大きい。また、それが大和と水系軸を異にする近江の地域で見出されたことの意味合いにも注目しておきたい。これを受けて現状で想定し得ることを俄かに述べることは早計の誹りを免れ得まいが、今後の調査と研究に向けた問題事項として提出すべきことは下記のとおりである。

第一点は鞆という特別な矢入れ具の創出と絡む問題で、具体的にはその時期と場所である。現状では出土の 2 例はどちらも鞆を構成する主要部材の横帯部分の残欠であり、完品として機能を果たす鞆そのものではない。しかし、首長の威信財に属する武具としての鞆を製作するための部材なのか製品なのかという観点で述べると、鞆製作を想定できる構造と繊維組織を保ったものであり、鞆そのものがパーツとなって検出されたことを考えてよい。集落跡での検出を受けて即座に想像されることを列挙すれば、①古墳副葬武具（鞆）を最初に製作し始めた工房跡の至近地立地。時期や契機は当然古墳の成立を前提とすることになる。②古墳の埋葬儀礼そのものに不可欠な武具とそれに関わる副葬品としての存在。③古墳時代開始期を目前にしてその創出に関わる祭儀のような集落内の儀礼行為に用いられたツール。一つには鞆試作品の可能性がある。④鞆の発案や登場をめぐる武具としての器財創出の祭祀が神聖な場で執り行われ、その後の用途も古墳は未だ築かれていないため、土坑や導水溝の水場の祭祀遺構を最後の場とした。導水遺構は古式の例が守山市服部遺跡（庄内式期・一木式）と纏向遺跡（寺沢編年布留 0 式期・組合せ式）とで伯仲する時期となり、やはり近江と大和に内在する祭儀の移行過程であるため、溝や木樋を有するなどの使い分けなど遺構を含むこれらも起源論では重要になるが、現状では不明とならざるを得ない。

以上、様々なことに考えが及び、状況と証拠との間に介在する懸隔は甚だ大きい。しかし、古墳時代以降の副葬品としての鞆への系譜は当然首肯でき、既に研究の深化をみている鞆の材質や形態、型式分類と製作技法などの既往研究と本研究の進捗からは、纏向例も稲部例も鼓山タイプに比定でき、その創作の端緒と説明できる成果を得たことになる。出土状態の検討では先ず①は否認でき、共存関係にある土器からは、最初期の古墳の副葬品として供された保証は得られず、②を主張することもか

なり困難である。時間的問題と遺構の性格を鑑みれば、③や④には賛意が示されようが、試作の物証はなく、③は成り立ち難い。消去法的な類推では、④の蓋然性が大きいことが検討の末には言えるかもしれない。古墳副葬例は近畿・中国から北陸・東北や北部九州に及び、その創出に関わった前身地域と用途の場所が他ならぬ大和と近江の祭祀遺構ということがこのたびクローズアップされたことの限界ではある。絹製の綾織物はまったく弥生時代後期以前には存在せず、その始原が古墳の誕生と密接に関係することがこのたび初めて判明し、それが古墳出現期の集落側の祭祀の場において土器をしっかりと伴って検証されたことが最も重要な成果である。その歴史的意義を過少評価することはできず、その開始時期をめぐるミッシングリングは今後の課題として大きく残る。

### （3）対中国交流をも念頭に置く展望と課題

以上を踏まえつつ、武具として鞆が目指された絹製織物の高度な技術の伝来やその成立の時期をめぐる問題が浮上したことになり、既に古墳築造が始まる前提で、その副葬祭祀具の威信を示すものとしてヤマト王権がその創始を発動し作られたのか。副葬に先立つ集落祭祀が短い時期ながら創出と関わって存在したのか。それがなぜ纏向遺跡と近江湖東の稲部遺跡なのか。現状認識からは不明なことばかりとなり判然としないけれど、その行為の時期や検出遺構が大きな鍵を握っているとみて大過ない。同出した土器類の年代については、幸いにして稲部遺跡 19 次調査溝 SD02 の土器類と纏向遺跡辻地区土坑 10 の土器類は、ほぼ同時期の所産であることは疑いない。それぞれが幾分古い資料を随伴するものの、下限の土器の時期は庄内式期最末であり、典型布留式期のものは含まれていない。時を同じくする祭祀行為が大和と近江の集落で行われたと目される。きわめて僅少な資料が直線距離にして約 92km 離れた近江湖東と大和の盆地東南部の古墳出現期の集落の祭場から検出されたことが共通項であるものの、その一方はヤマト王権の王都とされる纏向遺跡であったことは極めて示唆に富む。纏向遺跡には庄内式期最末に機能した東西軸の王宮の諸施設の建設が推定されており、王権の儀礼と関わるものが両地域にほぼ同時期に端緒をなすように存在したことになる。実測資料に限っても外来系土器の存在比率はきわめて高

いと言える。就中、纏向遺跡辻土坑 10 からは湖南産・湖東産の搬入資料（受口状口縁甕）が確認されており、稲部遺跡溝 SD02 出土の近江在地の受口状口縁甕と時間的なクロスチェックまでも可能とした。土器との共伴関係は綾織の繊維製品の技術的交流の共時性をも積極的に反映した証左と言えるだろう。中でも湖東は北陸・東海からの物流経路の結節地であり、近畿の南北経路を介して大阪湾岸や大和盆地との集団と繋がる遠距離通交の役割の担える地域と言える。近畿様式を成していた器種でも高坏や器台は東海西部への同化への歩みが窺える。

上記の遺物をめぐっての物資流通や交易の時空的環境を前提として紐帯関係の考究の歩を進めれば、両繊維製品出土地の由来が海の向こうの中国大陆や朝鮮半島帯方郡にあることも臆測される。この時期のことを知る上での一等史料である三国志『魏書』東夷伝倭人条に記された卑弥呼治世下の対魏外交による下賜品など招来物産にも注意が及ぶ。構成品の一部とみなすことは証左不足であるが、絹や絹製品は倭からの答礼品にも加わっており、相互の技術交流や工人の動きに史料に姿を現さない文物が存在したことは考えられてよい。鉄製の甲冑や長刀をはじめ、特殊な絹の綾織など中国由来のものが直截に加わってくる余地はある。真相はなお不鮮明な点が多いけれど、3 世紀の 240 年代前後の古墳出現期は他律的な面でも大きな画期点であり、かかる推量は荒唐無稽の乱暴なものではなく、頗る現実味を帯びた物証の一つが検討の俎上に初めて乗ったことを匂わせて、今は筆を置く。

## IX. おわりに

本稿は彦根市の戸塚洋輔が発掘調査を担当し、その後、出土資料の整理や報告書の作成、遺跡の保全と開発との調整を進めつつ鋭意取り組んでいる稲部遺跡の出土資料の一例が丁寧な探索、検討によって奈良県桜井市纏向遺跡の既出資料と濃密な関係にあることが判明したため、その意義の重大さに鑑み、まずは当研究所の紀要にそれら比較調査の概要の提示と纏向遺跡例の観察結果の詳述を試みたものである。戸塚の基礎調査並びに繊維組織調査と紡織技術の解明に加わった福井大学准教授の東村純子による周到な観察と記録、専門的な考証が第一段階として実ったもので、学界に裨益するところ大と思わ

れる。しかし、研究の途上であることも事実であり、細部において見識ある意見も乞いたく拙速にまとめた。

I～VIII 章で委細を尽くしたように、奈良県桜井市纏向遺跡辻地区土坑 10 出土の綾織の繊維製品は、既に半世紀以上も前に姿を現したものであり、調査担当者の石野博信の間違いない筆跡（細書マジックインキ黒）で「織物（平織と綾織）」と書かれた白色ラベルも共伴した土器類とともに朽ち果てずに存在した。それは 1971 年 10 月 28 日に検出されたもので、当時でも稀少な繊維資料とみなされたためか、土坑中での出土状態を保ったまま周囲の土ごと石膏固めによって遺物本位に丁寧に取り上げられていた。行政調査の制約や自然科学的な保存処理を行っていない悪条件にもかかわらず、比較的良好かつ安定した状況を保って今日に至ったことは、今となっては奇跡的と言わねばなるまい。この資料と遭遇した石野博信・関川尚功の臨機の対応は往時の発掘調査現場運営の備品環境や学問的な状況を思えば、調査担当者の知恵や工夫、知識、経験に委ねられることが多く、両氏に対し共同執筆した 3 名は満腔の敬意を表したい。他に発掘調査日誌のような記録類にあたったわけではないものの、報告書（石野・関川 1971）に図や写真が掲載されている筒形の繊維製品と土器（甕）1 点は、橿原考古学研究所附属博物館の収蔵庫に保管されており、実に 54 年の歳月を経て詳細観察と考証の陽の目を見た。これは奈良県庁の文化財保存課勤務の事務職身分でありながら、太田遺跡周辺の諸開発に対して目を光らせ事前調査として実際に現場をスタートさせた纏向遺跡の初期調査が間違いなく奏功しており、半世紀という学史の長さとは巨大な遺跡のたび重なるその後の道程が回顧される。

本資料は、土坑中で共伴した土器類（コンテナ数箱）の存在が新たに判明し、図化されている甕 1 点のみではなく、まとまった破片数の共伴土器の存在が詳らかになり、桜井市教育委員会が所蔵していた。滋賀県彦根市稲部遺跡溝 SD02 出土資料に関説して時期決定のために欠かせないものであり、所蔵者の桜井市に熟覧並びに写真撮影・実測図などの作業願いを申請し、本誌公表への快諾を得るとともに、実体顕微鏡によるミクロな観察も行った。経緯で触れたとおり、纏向遺跡初期調査出土の本資料は、稲部遺跡第 19 次調査 SD02 で出土をみた絹製綾織の繊維製品が古墳に副葬される韋の綾織組織と類似す

ることが判明したことに伴い、既報告の纏向遺跡出土資料中に酷似したものがあつたことを戸塚が報告書から認め、筆者等 3 人が急ぎ上記機関二か所で観察し、本体と共伴資料の存在を確認したものである。

- i) 榎原考古学研究所 もりおか ひでと
- ii) 彦根市文化財課 とつか ようすけ
- iii) 福井大学 ひがしむら じゅんこ

本稿は、以下のとおり分担して執筆した。I：森岡・戸塚、II（1）・（2）・（3）の一部：戸塚、II（3）土器 5～12、16 の記載：森岡、III：森岡、IV・V：戸塚、VI：東村、VII：戸塚、VIII：森岡、IX：森岡。

## 謝辞

纏向遺跡辻地区土坑 10 出土筒状繊維製品、土坑 10 出土土器の調査では、以下の機関と方々からご高配を賜り、ご教示いただいた。桜井市教育委員会、吉村和昭氏、青柳泰介氏、平井洗史氏、橋本輝彦氏、丹羽恵二氏、森暢郎氏、西村知浩氏。鞆の調査では、福井市立郷土歴史博物館、尼崎市立歴史博物館にご協力いただいた。古墳時代の鞆について杉井健氏、橋本達也氏、贅元洋氏からご教示をいただいた。稲部遺跡出土鞆等の繊維製品の構造と織組織の分析について公益財団法人元興寺文化財研究所からご協力をいただき、植田直見氏、小村真理氏、木沢直子氏からご教示をいただいた。稲部遺跡群の調査検討では黒田龍二氏、吉田広氏、若林邦彦氏、伊藤宏幸氏から、纏向遺跡全般に関しては、石野博信氏、関川尚功氏、寺沢薫氏から様々にご教示をいただいている。以上の方々に感謝を申し上げる。

## 註

- 1) 筒状繊維製品の実測と写真撮影は戸塚が行い、マイクロスコープ（DG-3 X、スカラ社）による顕微鏡写真の撮影は東村が行った。本稿は、森岡、東村、戸塚による観察所見に基づくものであり、ともに実見された小村真理氏からは織組織に関してご教示を得た。
- 2) 桜井市教育委員会では、「MT 4G16C 土坑 711028」と注記されたコンテナ約 5 箱分の土器が所蔵されている。今回、桜井市教育委員会のご高配により、これらの土器を観察し、器形の残りが良く、時期や地域をよく示す土器片を

優先的に実測した。「4G16C」とは、報告書掲載の図 62 辻地区遺構配置図のグリッド番号を指し、この地点には土坑 10 が位置する。また、甕（9）には「4G16C 土坑」、「織物（平織と綾織）」と記された 2 枚のカードが伴っていた。よつて、これらの土器は、土坑 10 出土土器とみてほぼ間違いないと考えられる。出土土器については、橋本輝彦氏、森暢郎氏からご教示をいただいた。10 は実見できていないが、1～4、13～15、17 は戸塚が、5～9、11、12、16 は森岡がそれぞれ実測した。

- 3) 東村がマイクロスコープを用いて撮影した筒状繊維製品の複数箇所の顕微鏡写真によつて検討した。
- 4) 本稿では、鞆を高度な織物の技術等によつて専門の工房で織物、繊維、木、革、漆を素材として複合的に作られた、矢尻を上向きにして矢を入れる細長い箱状の武具として定義し、名称は『倭名類聚抄』における「和名由岐」から「ゆき」とする（杉井 1996）。鞆は、主に古墳時代前期の首長墳で有稜系鉄鏃、有稜系銅鏃を伴つて副葬された例が知られる。
- 5) 1 号横帯は、現地での取り上げ時の寸法が長軸 19.5 cm、短軸 4.85 cm、取り上げた後の保存処理完了時の寸法が長軸 18.7 cm、短軸 4.5 cm であり、わずかな収縮が認められた。出土して取り上げた際に記録した計測値で検討する。
- 6) 鞆の矢入れ口側から底箱にかけての複数の横帯を矢入れ口側から、第 1 横帯、第 2 横帯、第 3 横帯として呼称する（図 17）。鼓山古墳 1 号鞆（鼓山古墳発掘調査団 1965）では、第 1 横帯と第 2 横帯に紐通しが伴い、同古墳 2 号鞆では第 2 横帯に紐通しが残存し、第 1 横帯にも本来備わつていたと推測される。2021 年 12 月 9 日、森岡、東村、戸塚が福井市立郷土歴史博物館で鼓山古墳 1 号・2 号鞆を実見した。
- 7) 古墳副葬鞆において、鞆の矢筒口縁部近くで蓋の可能性が考えられる繊維製品が伴つた例として、鼓山古墳 1 号・2 号鞆、鴨都波 1 号墳棺外西鞆、城の山古墳南鞆・北鞆・中央鞆等がある。これらの蓋の可能性が指摘されている例をみると、木製の蓋箱部を除いて高さは 10～20 cm 程度のものが通例である。一方、稲部遺跡出土 1 号横帯の高さはこれらの例に比べて 4.85 cm と低く、もしもこれに蓋箱部が装着されていたとしても、蓋として機能するために十分な高さをもつかどうかは不明である。よつて、1 号横帯を蓋とするには問題がないわけではないが、今後さらに検討

したい。

- 8) 弥生時代のⅡ・Ⅲ様式期の東大阪市鬼虎川遺跡29次調査出土矢の残存長は、長さ18.1cmの中柄狭部を除いて82.0cmである。古墳時代前期の古墳に副葬された矢としては、雪野山古墳が70～80cm程度、桜井市メスリ山古墳が80.0cm、石山古墳が80～85cm、会津大塚山古墳が85cm前後である。弥生時代から古墳時代前期の矢の全長は、70～85cm程度であったことが知られる(深澤2002)。
- 9) 麻と絹の素材別にみた織物の基本的な特徴については沢田むつ代氏の見解(沢田2005)に基づく。桜井市立埋蔵文化財センターにて実見したところ、糸の太さは約0.3mm、織密度は巾着状に絞られているため、判然としないが、経緯とも24～26本/cmとみられる。
- 10) 杉井健は、雪野山タイプと瓦谷タイプを革製鞆、鼓山タイプや会津大塚山タイプなどを繊維製鞆と区分し、後者については織物か編物かの検討が必要であるとする(杉井2013)。水澤幸一は、杉井分類の雪野山タイプと瓦谷タイプの鞆を「巻き編み」、鼓山タイプを含むそれ以外を「編み上げ」と区分する(水澤2016)。「巻き」、「編み」、「織り」などの定義については、編組製品研究の成果を踏まえて、素材と製作技法の視点から整理する必要がある。ここでは、「巻き」とは1つの素材でなんらかの胎を巻いていくこと、「編み」とは硬直な縦材に、横材を一定の方向からめていくこと。「織り」とは、機にかけた柔軟な経を綜統などで一斉に開口し、緯を通すこと、とする。
- 11) 会津大塚山タイプの場合、会津大塚山古墳(南棺)例では、矢筒本体の横方向の材として径0.5mm未満の撚りのかかった糸が、縦方向の材として幅1.2mm前後の薄い板状のものが観察されている(菊池1994)。また、雪野山古墳(棺外鞆)例では、矢筒本体の横方向の材として径0.5mmのS字撚りの糸が用いられ、縦材は会津大塚山古墳(南棺)例と同様のものである可能性が指摘されている(杉井1996)。
- 12) ただし、角山幸洋は、麻素材で緯三枚綾とする。素材については織密度が粗く、糸に撚りがかかっていることから麻とし、その布幅を考慮して矢筒本体の縦方向を経、横方向を緯、すなわち緯三枚綾と判断されたのではないかと推測する。
- 13) 佐々木由香氏よりご助言いただいた。また、鈴木康明氏より、編みによる具体的な手法についてご教示を得ており、あらためて別稿にまとめた。

14) 織耳としての組織の形態については、検討中である。

- 15) 「経三枚綾(緯三枚綾)」を織るには、3つの綜統(①～③)を用いるが、腰機の場合はソウコウ③を中筒で代用することができる。ここで注意したいのは、織る上面が「緯三枚綾」となるよう、設定することである。なぜなら、3つの綜統には、必要な経を順に上に引き上げる役割があり、上面を「緯三枚綾」に織る方が、綜統それぞれに絡ませる経の本数が少なく済むからである。
- 16) 雪野山古墳(棺外鞆)例ではS字撚り(前掲註11)、城の山古墳例(北鞆、中央鞆)ではZ撚りである(四柳2016)。
- 17) コプト織物とは、キリスト教に改宗した土着のエジプト人によって作られた綴織で、経と緯の平地部分に在来の亜麻、緯の文様部分に地中海対岸から搬入された羊毛が用いられる。古代エジプトでは、王朝時代以来、亜麻の糸作りにおいてS字方向に撚りがかけられたが、羊毛産地では紡錘の使用法が異なり、一般的にZ字方向に紡がれた。コプト織物では、羊毛も亜麻と同じS字方向に撚りがかけられる(東村ほか2012)。
- 18) 水澤幸一は、山王寺大柗塚古墳鞆、雪野山古墳棺外鞆、瓦谷古墳西棺鞆を「木製鞆」とした。また、伊賀市石山古墳鞆、高槻市土保山古墳鞆を「革製鞆」としつつ、石山古墳鞆は盾の可能性が高いとする。このように、杉井分類と水澤分類では、直弧文をもつ山王寺大柗塚古墳鞆、石山古墳鞆の扱いが異なる点には注意が必要である。
- 19) 水堂古墳は、前方後円形の墳丘、古相とみられる粘土槨、三角縁神獸鏡等の副葬品の再検討によれば古墳時代前期前葉、3世紀末頃の前方後円墳に位置づけられる可能性が高い。2022年5月30日、森岡、東村、戸塚が尼崎市立歴史博物館で帯状繊維製品を実見し、その特徴から鞆矢筒部における上部の残欠であると考えた。この他、古墳時代前期の古墳副葬品の鉄製品に付着した漆膜、繊維片を再検討することで、鞆の類例がさらに増えることが期待される。

## 参考文献

- 赤塚次郎(編) 1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書10 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 石野博信 1976a「Ⅱ. 遺構篇 第1章 古墳時代前期の遺構 2. 土壙」『纏向』桜井市教育委員会 pp.27-74
- 石野博信 1976b「Ⅴ. 考察篇 第4章 三輪山麓の祭祀の

- 系譜—大型土壙と建物跡—『纏向』 桜井市教育委員会 pp. 506-509
- 石野博信 (編) 2005『大和・纏向遺跡』 学生社
- 石野博信・関川尚功 1976『纏向』 桜井市教育委員会
- 植田直見・小村眞理・木沢直子・森岡秀人・吉田広・若林邦彦・東村純子・戸塚洋輔 2021「彦根市稲部遺跡出土漆塗繊維製品の自然科学的研究」『日本文化財科学会第 38 回大会研究発表要旨集』 日本文化財科学会 pp. 46-47
- 岡田圭司 2001「漆塗靱」『鴨都波 1 号墳調査概報』 御所市教育委員会 pp. 49-52
- 押元信幸 2003「鴨都波 1 号墳出土靱 復元研究」『古代文化』第 55 巻第 9 号、図版第 1・第 2 p. 528
- 榎本杜人・中村春寿 1975『楽浪漢墓第二冊』 楽浪漢墓刊行会 pp. 32-33
- 菊地芳朗 1994「会津大塚山古墳南棺出土の靱」『福島県立博物館紀要』第 8 号 pp. 65-86
- 小林和貴・鈴木三男 2016「城の山古墳出土靱の素材の植物種」『城の山古墳発掘報告書 (4～9 次調査)』 胎内市埋蔵文化財調査報告書第 26 集 pp. 190-198
- 沢田むつ代 2005「出土繊維の観察法」『季刊考古学』第 91 号 雄山閣 pp. 48-53
- 杉井 健 1996「靱の構造と成立の背景」『雪野山古墳の研究 考察篇』 八日市市教育委員会 pp. 107-144
- 杉井 健 2013a「漆塗り製品」『古墳時代の考古学』第 4 巻 (副葬品の型式と編年) 同成社 pp. 189-202
- 杉井 健 2013b「古墳時代前期の靱」『眠りから覚めた城の山古墳』第 1 回城の山古墳シンポジウム資料集 胎内市教育委員会 pp. 43-59
- 鈴木三八子 2005『織物構造図典：組織と技法』 日本織物文化研究会 pp. 39-45
- 高久健二 1993「楽浪墳墓の編年」『考古学雑誌』第 78 巻第 4 号 日本考古学会 pp. 33-77
- 筒井崇史 1992「瓦谷古墳出土の靱について」『京都府埋蔵文化財情報』第 45 号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター pp. 16-23
- 鼓山古墳発掘調査団 1965『鼓山古墳発掘調査報告』 福井市教育委員会
- 角山幸洋 1968「原始時代の織り物」『日本染織発達史』 田畑書店 pp. 15-50
- 寺沢 薫 1986「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 49 冊 奈良県教育委員会 pp. 371-397
- 寺沢 薫 2021『弥生国家論—国家はこうして生まれた』 敬文舎
- 寺沢 薫 2023『卑弥呼とヤマト王権』 中公選書 134 中央公論新社
- 寺澤 薫 2024「纏向王権と邪馬台国論」『考古学が解明する邪馬台国の時代』 日本考古学協会公開シンポジウム pp. 38-47
- 戸塚洋輔 2018「出土土器の編年の検討と大溝の時期」『稲部遺跡第 14 次発掘調査報告書』 彦根市埋蔵文化財調査報告書第 72 集 pp. 51-60
- 戸塚洋輔 2022「滋賀県彦根市稲部遺跡出土帯状漆塗繊維製品の発見と課題」『古代文化』第 74 巻第 2 号 (財) 古代学協会 pp. 107-118
- 戸塚洋輔・森岡秀人・吉田広・若林邦彦・東村純子・植田直見・小村眞理・木沢直子 2021「彦根市稲部遺跡出土漆塗繊維製品の調査」『日本文化財科学会第 38 回大会研究発表要旨集』 日本文化財科学会 pp. 44-45
- 戸塚洋輔・森岡秀人・吉田広・若林邦彦・橋本達也・東村純子・植田直見・小村眞理・木沢直子 2024「滋賀県彦根市稲部遺跡出土の 3 世紀の靱」『一般社団法人日本考古学協会第 90 回総会 研究発表要旨』 一般社団法人日本考古学協会 p. 33
- 中川正人 1996「雪野山古墳出土漆製品の材質と技法」『雪野山古墳の研究 考察篇』 八日市市教育委員会 pp. 411-431
- 中橋孝博・永井昌文 1989「形質」『弥生文化の研究』第 1 巻 弥生人とその環境 雄山閣 p. 40
- 沼 弘 1968「靱についての考察」『考古福井』第 1 号 福井考古学研究会 pp. 25-30
- 橋本達也 2003「有機質製甲冑・盾・靱・胡籥・弓」『考古資料大観第 7 巻 弥生・古墳時代 鉄・金銅製品』 小学館 pp. 194-199
- 橋本達也 2014「元稻荷古墳の靱」『元稻荷古墳』向日市埋蔵文化財調査報告書第 101 集 pp. 183-185
- 橋本輝彦 2013「纏向遺跡第 65 次調査の概要と巾着状布製品の分析について」『纏向学研究』第 1 号 桜井市纏向学研究センター pp. 65-74
- 橋本輝彦 2014「第 1 章纏向遺跡の発掘調査」『邪馬台国か

らヤマト王権へ』奈良大ブックレット ナカニシヤ出版 pp. 5-54

橋本輝彦 2021「纏向遺跡研究の今」『季刊考古学』第156号 雄山閣 pp. 99-106

橋本輝彦・奥山誠義・河原一樹・六車美保・宮路淳子・中澤隆・田中康仁 2013「纏向遺跡出土巾着状布製品の総合調査」『纏向学研究』第1号 桜井市纏向学研究センター pp. 65-93

伴野幸一 2001「下長遺跡出土土器の編年の位置」『下長遺跡発掘調査報告書IX』守山市教育委員会 pp. 51-60

伴野幸一 2006「近江地域一野洲川流域を中心に」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター pp. 49-66

伴野幸一 2024「伊勢遺跡と近江の弥生社会」『伊勢遺跡と卑弥呼の共立』吉川弘文館

伴野幸一・大橋信弥・高橋敦・青柳泰介・鈴木裕明 2021「服部遺跡出土の導水施設の再評価ー樹種鑑定と築造時期ー」『淡海文化財論叢』第13輯 pp. 81-93

東村純子・魚津知克・松本泰典 2018「糸は、なぜ右捻り（S字方向）なのかー福井県一乗谷朝倉氏遺跡で出土した紡織資料を事例としてー」『日本文化財科学会第35回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会 pp. 338-339

東村純子・横山操・村上由美子・成瀬正和・中村力也・仲村匡司・泉拓良 2012「京都大学所蔵のコプト織物の調査ー（1）考古学からみた織り技法ー」『日本文化財科学会第29回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会 pp. 20-21

深澤芳樹 2002「弥生時代の矢について」『武器の進化と退化の学際的研究ー弓矢編ー』日文研叢書27 国際日本文化研究センター pp. 85-100

水澤幸一 2016「靱の構造と位相」『城の山古墳発掘調査報告書（4～9次調査）』胎内市埋蔵文化財調査報告書第26集 pp. 380-429

本吉恵理子 2016「城の山古墳出土靱の漆膜構造調査」『城の山古墳発掘調査報告書（4～9次調査）』胎内市埋蔵文化財調査報告書第26集 pp. 241-263

森岡秀人 2015「『卑弥呼の時代』の虚実ー考古代と科学年代群がもたらす諸問題ー」『卑弥呼ー女王創出の現象学ー』大阪府立弥生文化博物館 pp. 114-131

森岡秀人 2023「『原倭国』の形成過程と纏向遺跡」『纏向学からの発信』桜井市纏向学研究センター編 大和書房 pp. 99-153

森岡秀人・西村歩（編）2006『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター

四柳嘉章 2016「城の山古墳出土漆製品の科学分析」『城の山古墳発掘調査報告書（4～9次調査）』胎内市埋蔵文化財調査報告書第26集 pp. 222-240

米田敏幸 1991「2土師器の編年 1近畿」『古墳時代の研究 第6巻土師器と須恵器』雄山閣 pp. 19-33

申敬徹 1991「金海大成洞古墳群ー第二次発掘調査の概要と成果ー」『東アジアの古代文化』68号 大和書房 pp. 2-18

黄能馥・陳娟娟（齋藤齊訳）2015『中国絹織物全史 七千年の美と技』国書刊行会 pp. 30-71

## 図出典

図1：橋本2021改変。

図2：石野・関川1976改変。

図3：石野・関川1976。

図4：1～4・13～15・17は戸塚原図、5～9・11・12・16は森岡原図をトレース、10は石野・関川1976図95中段右上1を再トレース。

図5・6：戸塚原図をトレース。

図7・8：戸塚撮影。

図9：上層外面、下層内面は公益財団法人元興寺文化財研究所作成・トレース、下層外面は戸塚原図をトレース、断面復元図は戸塚作成。

図10：上層外面は戸塚原図をトレース、下層外面は公益財団法人元興寺文化財研究所・戸塚原図を合成してトレース。写真は戸塚撮影。

図11：樋口杏奈・岡田ひとみ・戸塚原図を佐藤利江トレース。

図12：戸塚作成。

図13・14：東村作成。

図15：東村作成・撮影。

図16：東村撮影。

図17：岡田ひとみ作成模式図より戸塚作成。

図18：福井市立郷土歴史博物館所蔵、戸塚撮影。

図19：橋本2014を改変して戸塚作成。

図4・5・6・10・12、図9の下層外面・断面復元図のトレースは戸塚が行った。

## 表出典

表1：戸塚作成。表2：杉井2013aを参考に戸塚作成。